

月刊

たくさんのふしぎ

やす い きよ こ 文・写真
にし やまあきら 絵



わたしの スカート

わたしのスカート

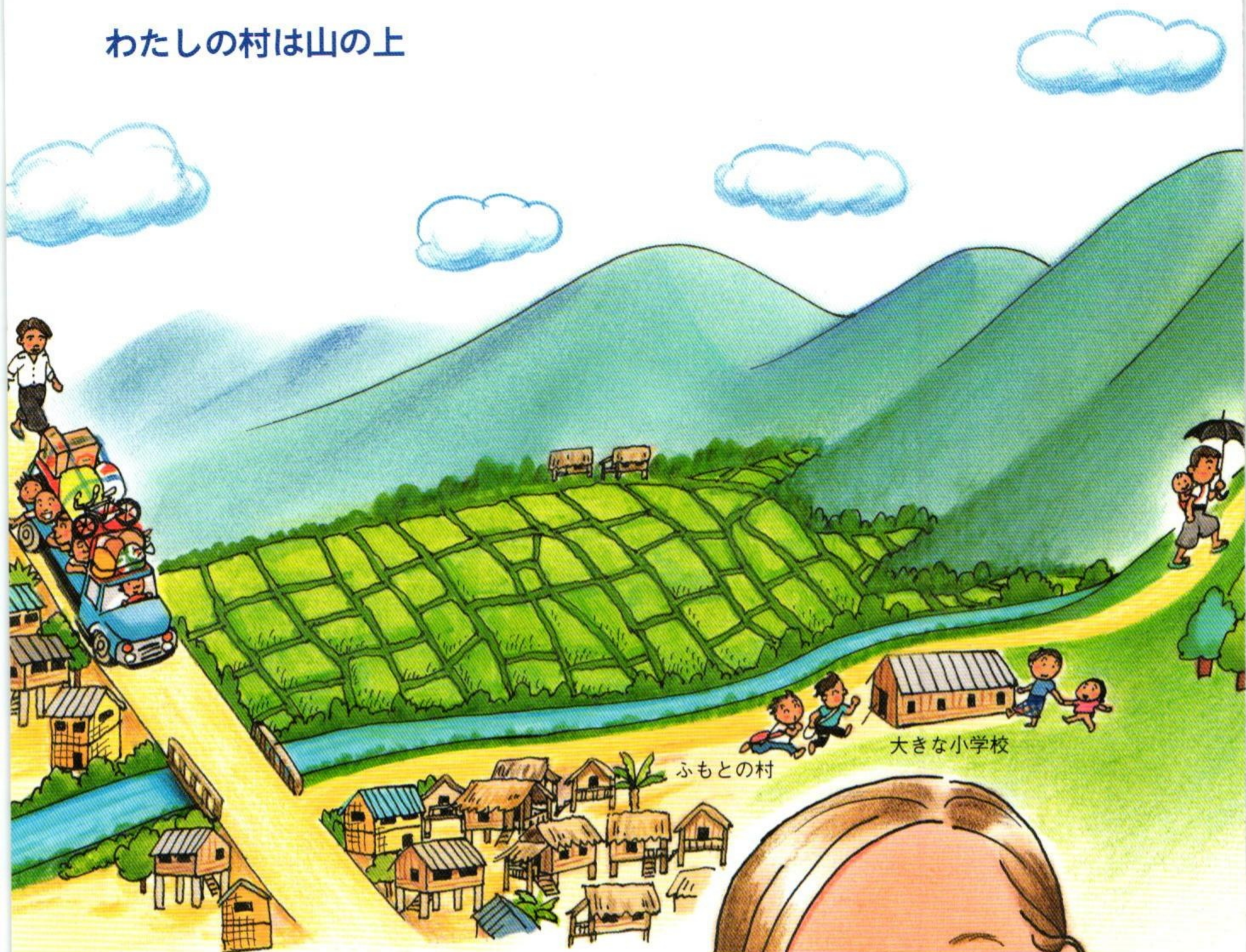
やす い きよ こ 文・写真 にし やま あきら 絵
安井清子 文・写真 西山晶 絵



わたしの村、ファイソン村です。

福音館書店 2004

わたしの村は山の上

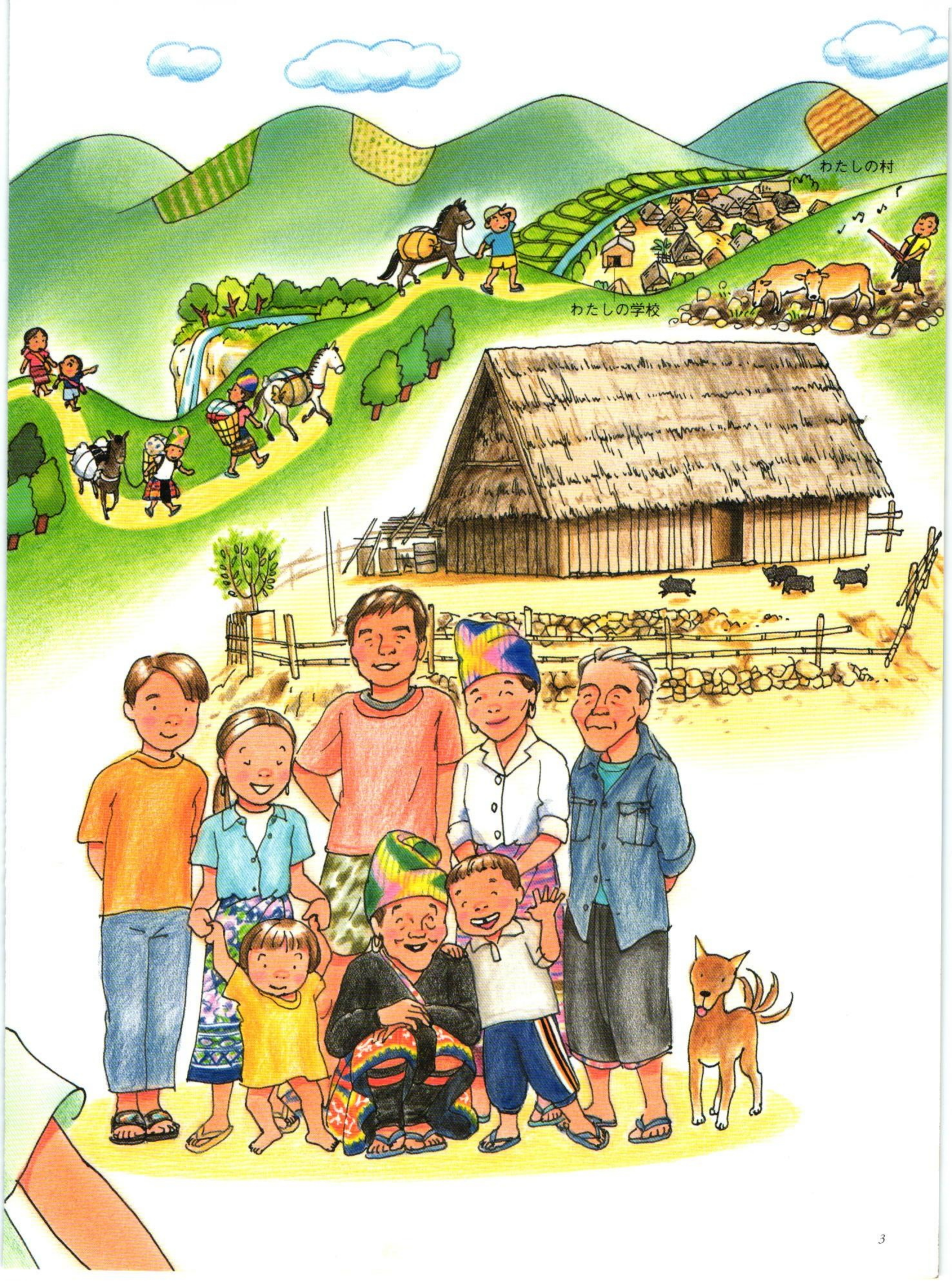


わたしの名前はマイ。

ラオスという国の北の地方の、山にかこまれた小さな村に住んでいます。

わたしの村は、ふもとの車が通る大きな道から、山道をのぼって、のぼってまたのぼって、ちょっとくだったところにあります。山道は細いので、車はのぼってこられません。

村の人たちは畑はたけにも、ふもとの村にも、歩いて行きます。



わたしの村

わたしの学校



水田を耕す水牛と田植え



ラオのうたとおどり



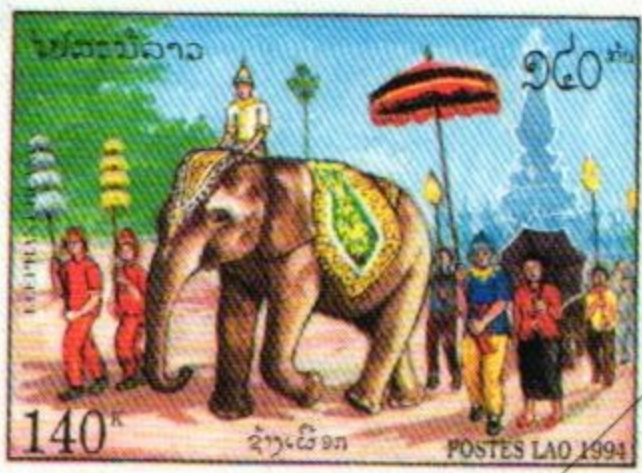
仏像に祈る

ラオスは東南アジアの内陸国。
日本の本州と同じくらいの面積に、約500万人が住んでいます。

ラオスにはたくさんの民族がくらしている

山の村に住むわたしたちは「モン族」という民族です。ふもとは、「ラオ族」という民族が住んでいます。山をくだっただけなのに、ちがう言葉をお話しているし、ちがう民族衣装をもっているんですよ。

ラオスには、ラオ族やモン族だけでなく、たくさんの民族がくらしています。50くらいの民族がいるんですって。



ぞうのパレード



山のトウモロコシ畑



タイダム



ミエン

ラオスで発行されている切手です。さまざまな民族の衣装やくらしがあらわされています。それぞれ、ちがう言葉や文化をもっています。



モン



プータイ



竹の楽器をふくモン



川で魚をとる



タイテン



カトゥ



ムーイ



タオイ



クー



アカ



クイ

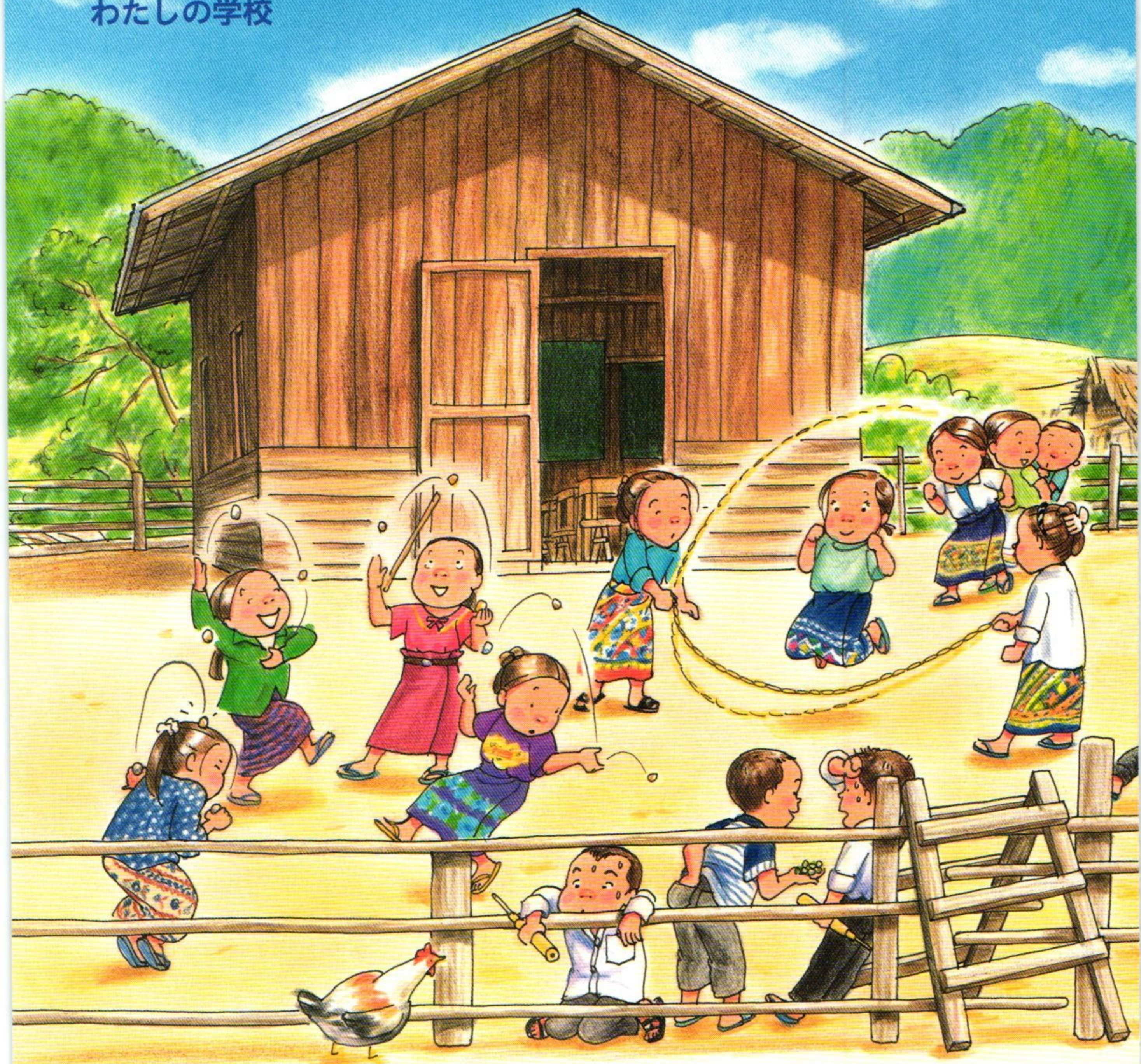


ラオスの山としか

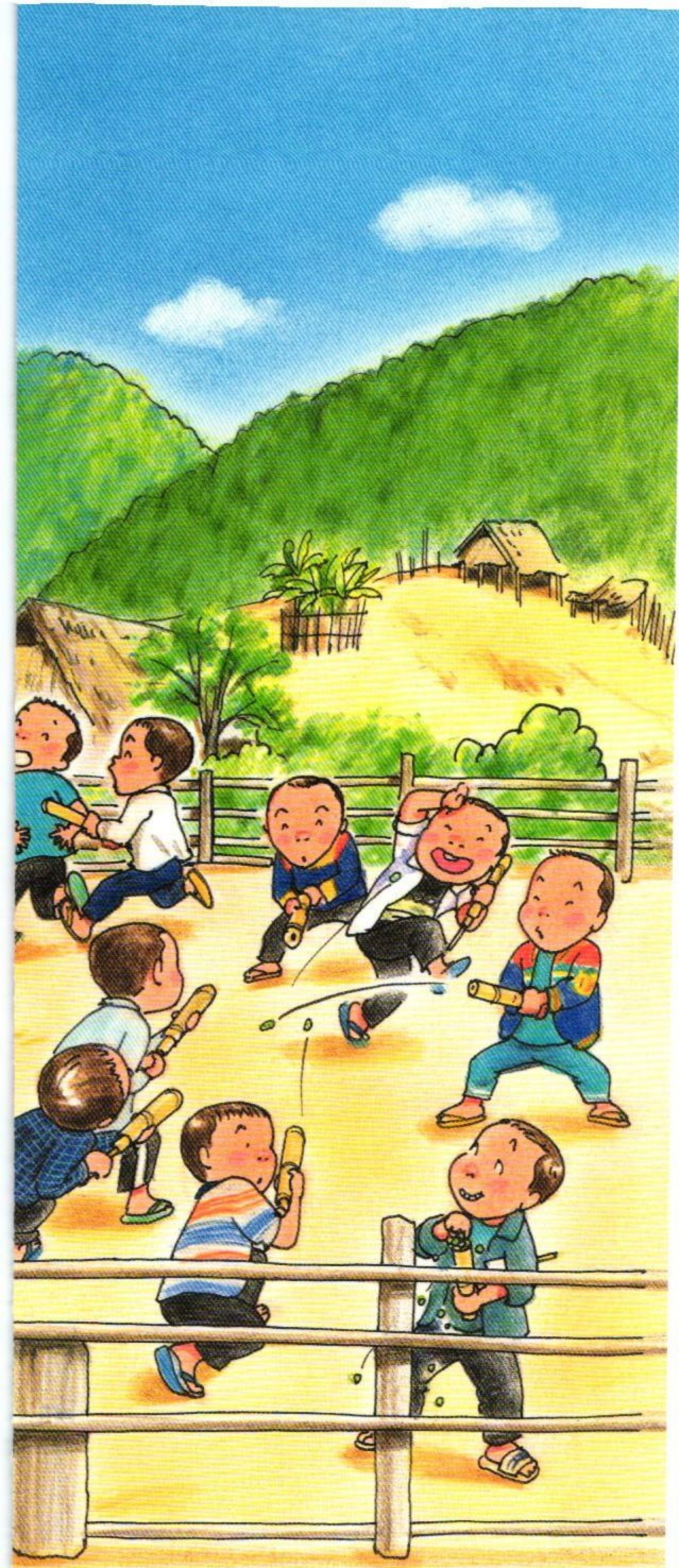
学校では、ラオス語を勉強します。ラオス語はラオ族の言葉です。ラオスに住む民族のなかで一番多いのがラオ族なので、ラオス語が国語になっているのです。モン語とはぜんぜんちがうので、最初はわからなかったけれど、今は少し読み書きもできるようになりました。

「町に行ったら、ラオス語がわからないとこまるから、しっかり勉強するんだよ」と、おばあちゃんは言います。おばあちゃんは、モン語しか話せません。

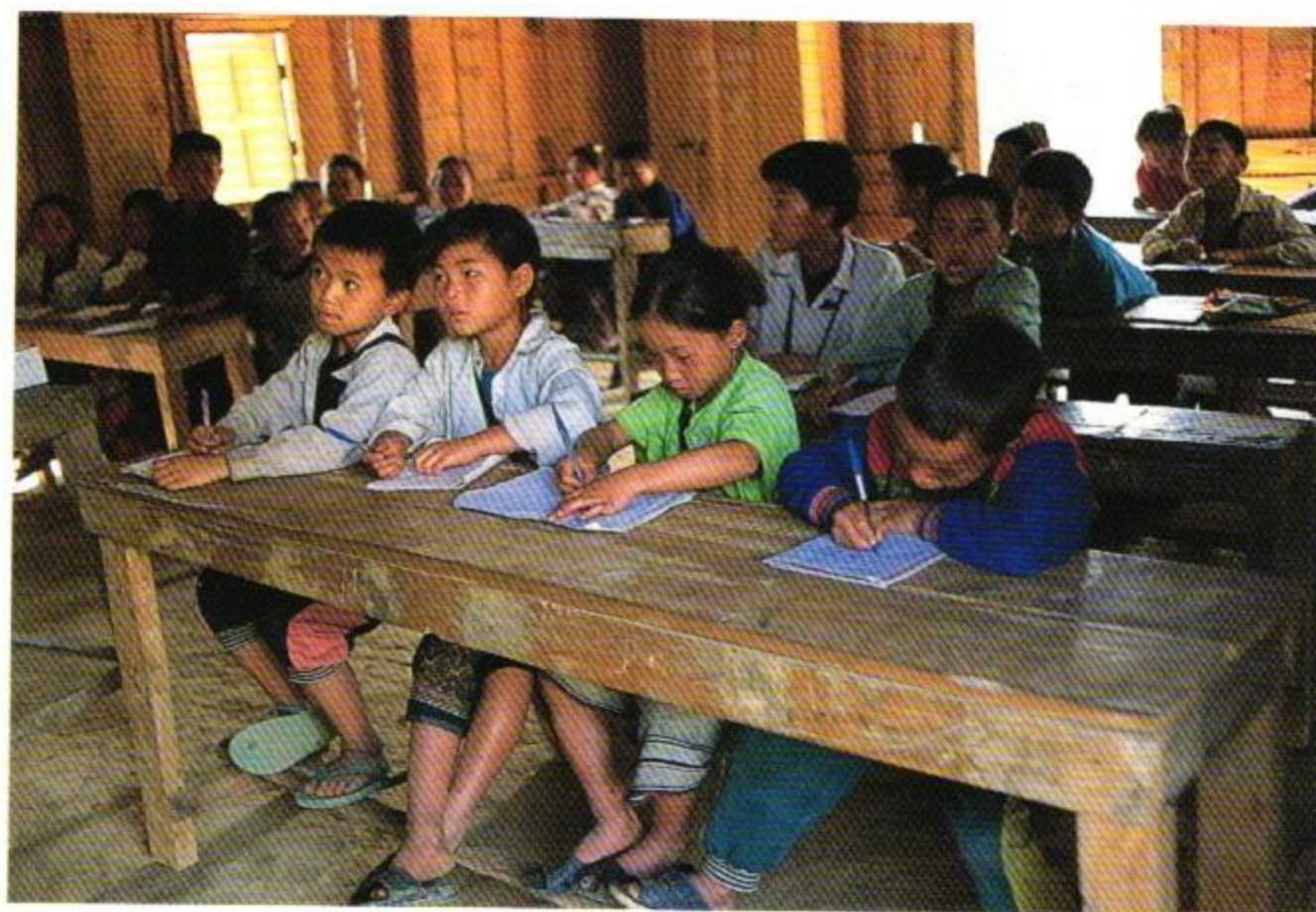
わたしの学校



わたしは、今、小学校2年生です。学校は村はずれにあります。教室はたったひとつ、先生はひとりの小さな小学校。1年生と2年生だけの分校です。3年生になったら、おにいさんやおねえさんといっしょに、朝早く起きて、山をくだってふもとの大きな村の小学校まで通わなくちゃいけません。3年生にはなりたいけど、毎日、山道を1時間以上も歩くのは、たいへんだなあ。



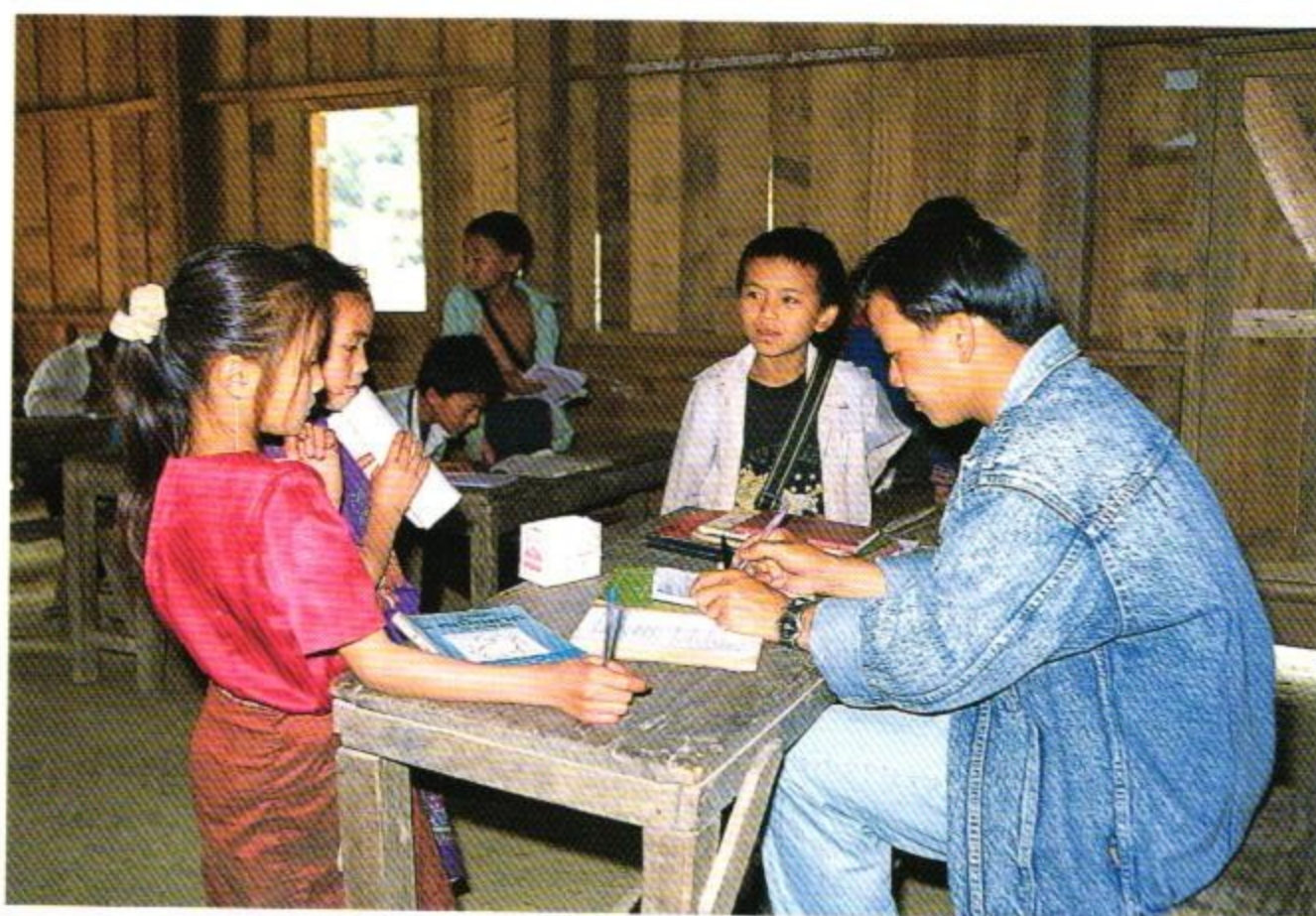
学校に行くときは、シンをはいていきます。シンというのは、もともとはラオの民族衣装で、女の人の着る筒型のスカートです。



みんな教科書をもっていないので、いっしょけんめいノートにうつします。



ラオス語の授業です。先生が黒板に書く文章が教科書がわり。



「答え、あっているかしら？」
タイ先生はこの村の生まれ。町の高校を卒業して先生になって村に帰ってきました。



わたしはほんとうは、モン
の民族衣装みんぞくいしゅうのスカートすかーとが好きです。

モンのスカートは細かい刺しゅうと、ロウで模様もようを描いて染めた布ぬのからできていて、とてもすてきな。

それなのにわたしは、まだ自分のモンのスカートをもっていません。いつもおねえちゃんのおさがりばかり。でもね、この前おかあさんが、「今度のお正月に間に合うように、マイに新しいスカートを作ってあげようね」って言ったんです。

わたしはうれしくてうれしくて、とびあがってしまいました。

あさ たね
麻の種をまく



でも、おかあさんは言いました。

「さあ、まず、麻の種をまくのよ」

「麻？ どうして？」

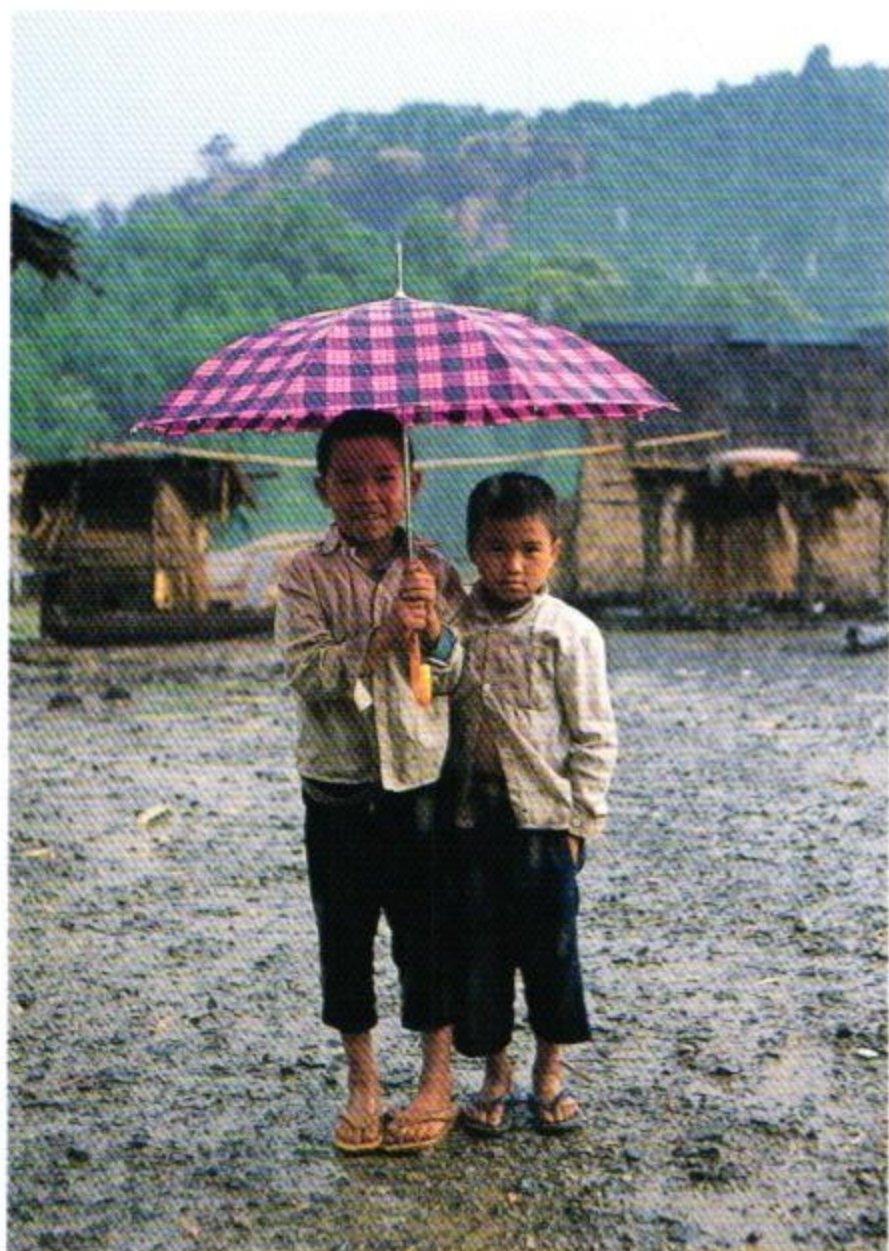
「麻からスカートのぬのの布を作るのよ」

4月、村のはずれの畑はたけに、おかあさんと麻の種あさ たねをまきました。

種たねは芽めを出し、2週間もすると、小さな葉はっぱが元気に風にそよぎます。



2週間目くらいの麻あさ。



雨が降り出したよ。

この頃、雨が降り出します。ラオスでは、1年の半分、4月から9月頃まで、たくさんの雨が降ります。でも、あとの半分は雨が降りません。この雨の降る時期に、稲やトウモロコシ、そして麻などの大切な作物さくもつが大きく育つんです。

山道はどろどろになってすべるし、学校へ通うのはたいへん。

でもね、うまいことにわたしたちの学校は、6月から8月が夏休みです。夏休みが長いほんとうの理由は、先生も自分の田んぼや畑はたけの仕事しごとがあるし、わたしたち子どもも畑仕事を手伝わなくちゃいけないからです。

あさいと
麻糸を作る



麻はぐんぐん育^{そだ}って、おとうさんの背^せよりも大きくなりました。8月はじめのある日、おかあさんが言いました。

「さあ、麻を刈^かりに行きましょう。マイも手伝^{てつだ}ってね」

麻はびっしり植^うわっているの、くきはひよろひよろと高くのび、上のほうに葉^はっぱがついています。おかあさんが刈^かり、わたしはいっしょうけんめい運^{はこ}びました。

麻は、刈^かり取^とったその日のうちに余^よ分^{ぶん}な枝^{えだ}や葉^はっぱを落^おとします。くきは、ただの棒^{ぼう}みたいになりました。そして、太陽^{たいよう}の光^ひに4、5日干^ほします。



麻^{あさ}のくきを、太陽^{たいよう}の光^ひに干^ほします。



かわいた麻あさのくきをぎゅっぎゅと
 しなわせ、なかの芯しんと皮かわの間に指ゆびを
 入れて、ぎゅーっと皮かわをはぎます。
 おかあさん、指ゆびはいたくないのかし
 ら？ おかあさんは平気へいきな顔をして、
 どんどん麻あさのくきの皮かわをはいでいき
 ます。

この、はいだ麻あさのくきの皮かわの束たばを
 合わせると、ポンドゥーと呼ぶ大き
 な麻玉あさだまができました。おかあさんは
 壁かべにぶらさげた大きな麻玉あさだまをうれし
 そうに見て言いました。

「さあ、今年あさだまの大切な麻玉よ。これ
 があなたのスカートになるのよ」

わたしは聞きました。

「あと何日でスカートができるの？」

すると、おかあさんは笑わらって言い
 ました。

「まだまだ、うんと時間がかかるわ
 よ。おかあさんは、魔法まほうで麻玉あさだまをス
 カートにか変えるんじゃないの。ひと
 つひとつ、手でやっていくのよ。そ
 れに、みんなの手も必要ひつようなの。おば
 あちゃんの手も、マイ、あなたの手
 も必要ひつようなのよ」



麻玉あさだまは大人の頭よりもずっと大きくなりました。ひとつの
 玉から2～3枚まいのスカートができるんですって。

つぎは、はいだ麻の皮を長くつなげていくのです。おかあさんは暇さえあれば、麻玉からひとつかみずつ麻の束を取り出しては、手を動かしています。

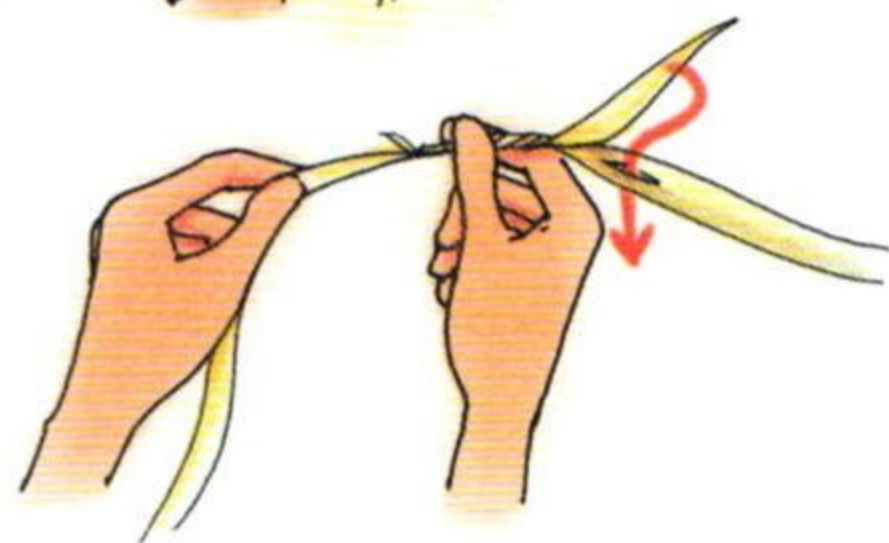
1本のはしを裂いて、もう1本のはしとより合わせてつなぎ、片手に8の字に巻きつけていきます。こうして麻の皮を長く長く1本につなげていくんです。

おかあさんや村の女の人们たちは、山道を歩くときだって、ずっと手を動かしています。手の甲がまいた麻でいっぱいになると、麻の束を天井の梁の上に並べます。大きな麻玉は、どんどん小さくなっていきます。わたしは、並べられていく麻の束がふえるのが、楽しみです。束がたくさん並んだとき、おかあさんは言いました。

「さあ、糸をよりましょう」



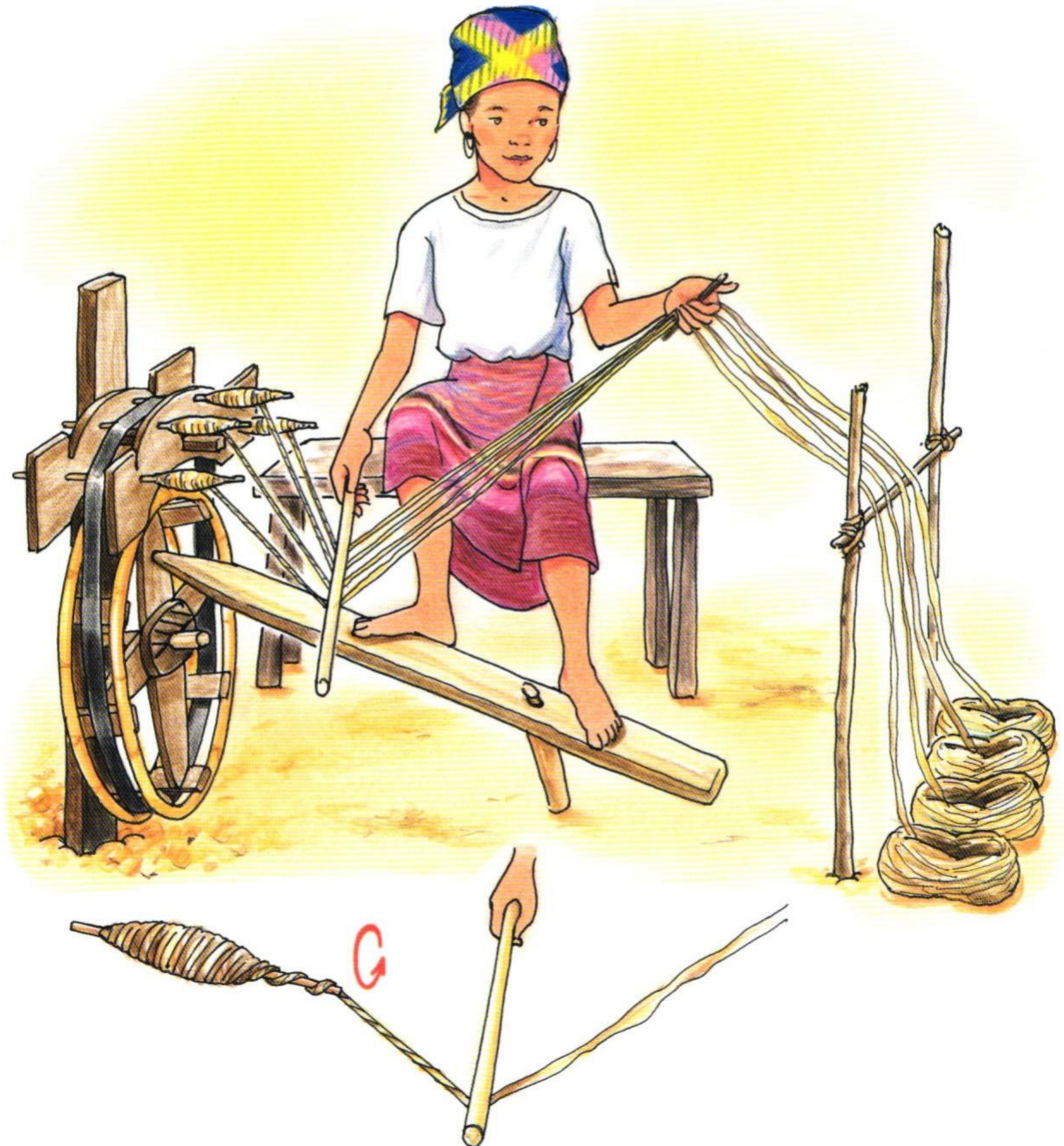
はり梁の上には、たくさん麻の束が並びました。

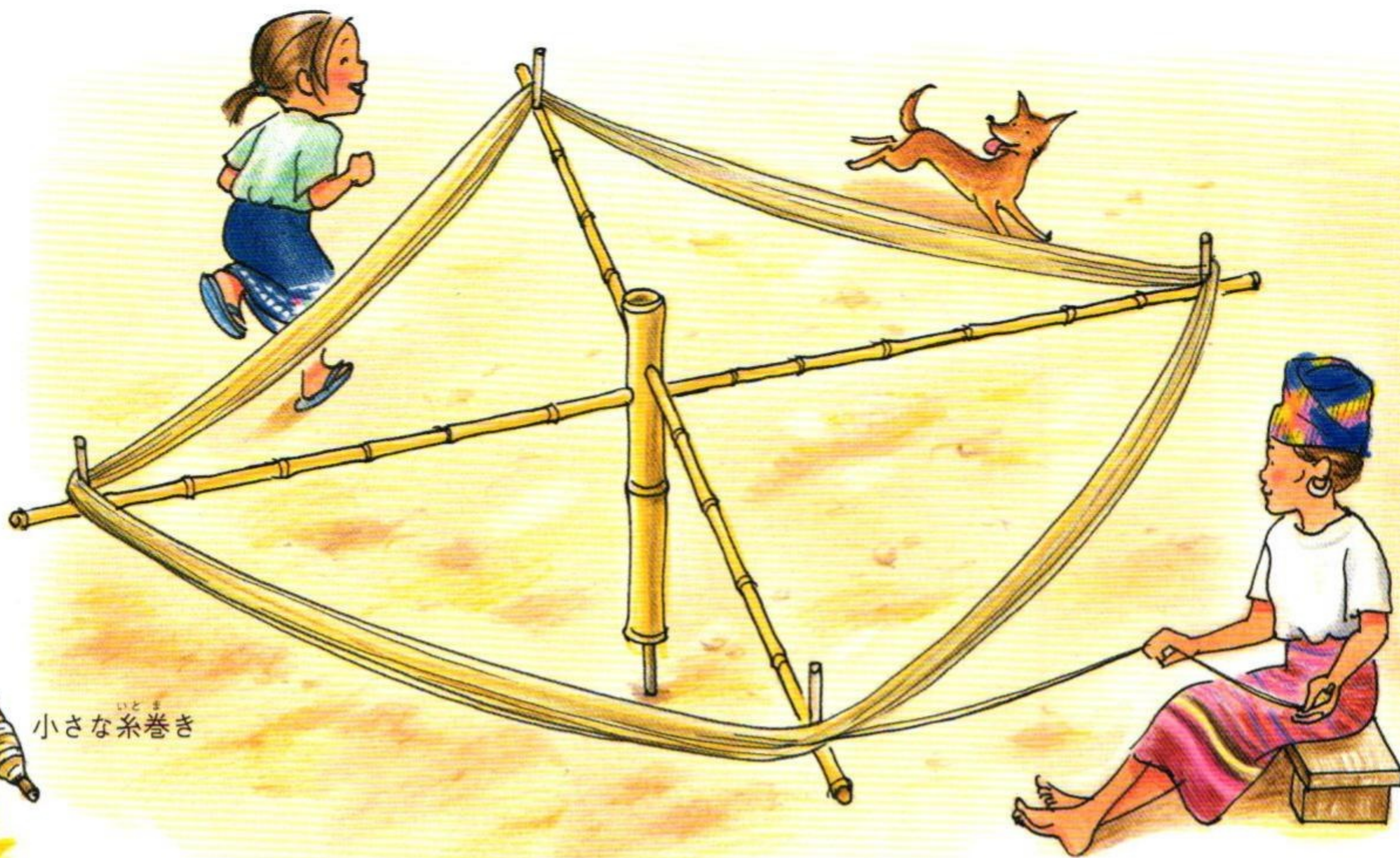


村には「糸より車」があります。足でぎこぎこことくと、糸まきがついた車が回るんです。すると、^{あさ}麻がねじられて、^{より}よりがかかっていくのです。

「こうして、^{かいてん}回転をかけるとね、^{あさ}麻の皮をつなげたものによりがかかって、^{じょうぶ}丈夫な糸になるのよ」とおかあさんが言いました。

かれ草の色をした糸がよりあがりました。





小さな糸巻き



大きな糸車

小さな糸巻きの糸を、大きな糸車につけ、回します。



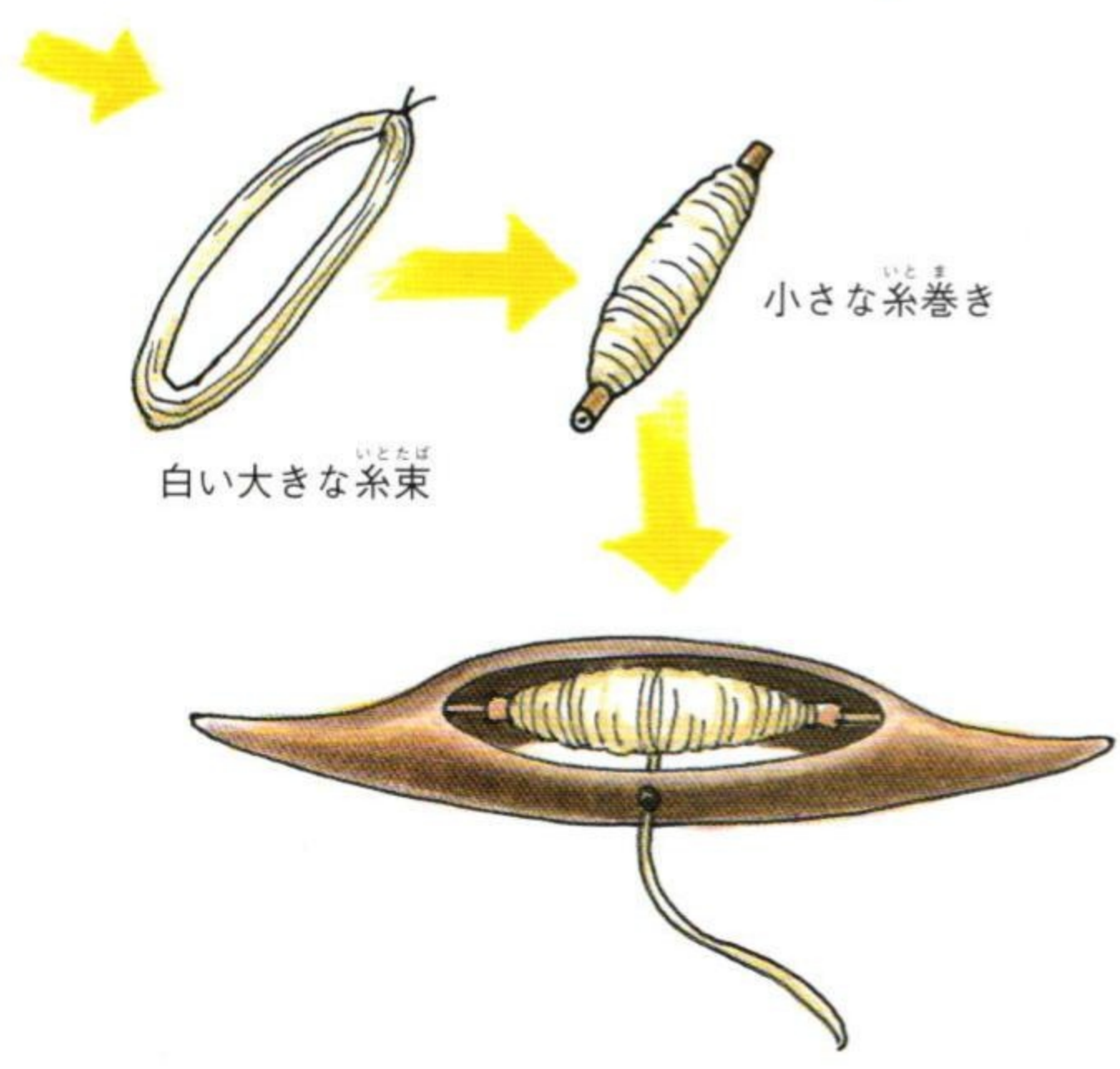
大きな糸束



糸を大きな束にして煮ると、糸全体が白くなります。

今度は大きな糸車の登場です。おかあさんは、小さな糸巻きに巻かれた糸を大きな糸車にかけて、大きな糸束にしました。その大きな糸束を大鍋に入れると、灰を入れグツグツグツグツ、3日間煮ました。

すると、草の色が抜けて麻の糸はまっ白になりました。

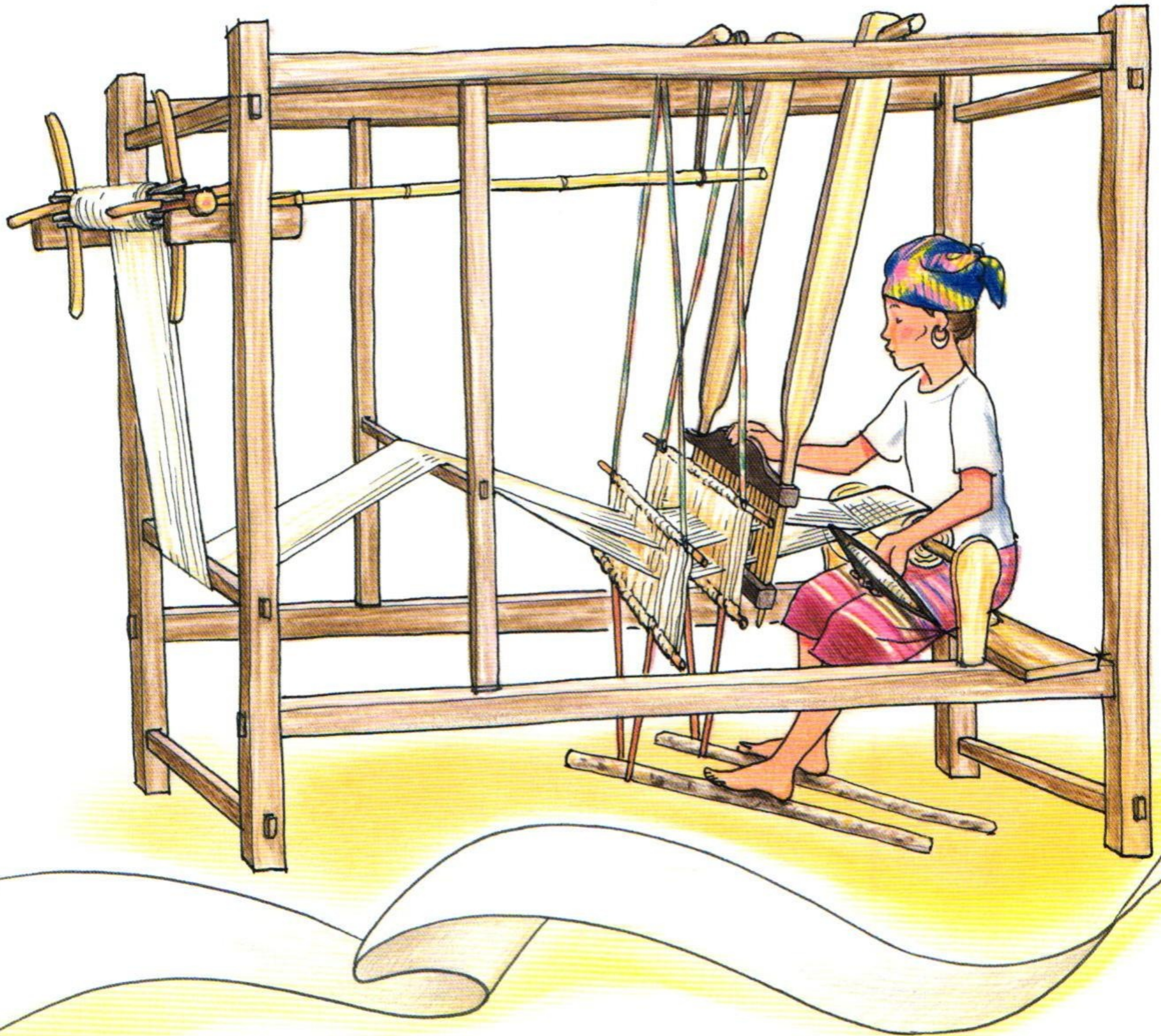


さわってみると、わあ、やわらかい。

小さな種^{たね}から育^{そだ}った麻^{あさ}が、こうして白い麻糸^{あさいと}になりました。

おかあさんは白くなった麻糸^{あさいと}を、ふたたび小さな糸巻き^{いとまき}に巻き取ります。小さな糸巻き^{いとまき}がいくつもできました。これを小舟^{こぶね}のような形をした木の入れものに入れると、機織り^{はたお}をするときに、スムーズに横糸^{よこいと}を通せるのです。

あさいと ぬの お
麻糸から布を織る



いよいよできた麻糸を布に織ります。

機織り機の足ペダルを、左右交互にふむと、縦にはった麻糸がひとつおきごとに、上がったたり下がったりします。その糸の間に横糸を通して、布を織っていきます。

おかあさんは、「モンのスカートを作るには、着る人の両手を広げた長さの4倍もの布を織らなくちゃいけないのよ」と、教えてくれました。



ただの白い布

もうか
口で模様を描いて
染めた布

し
刺しゅうをやる布



しかもモンのスカートは、その長い布を3つ縫い合わせて作られるんです。ウエストの部分にくる布は白い布。まんなかの布は、口で模様を描いて染めた布。そしてその部分の布は、ぜんぶ刺しゅうでうめられます。

長い布を3枚も織るなんて、なんてたいへんなのでしょうか。

でもおかあさんは「こんなのへっちゃらよ。ちょっと腰がいたくなるけどね」と、毎日毎日織り続け、10日ほどで3枚分、つまり両手を広げた長さの12倍もの布を織りあげました。

自分で刺しゅうをする



ある日、おかあさんが長い布ぬのをもってきて言いました。

「マイ。自分でスカートのすその刺しゅうしをするのよ」

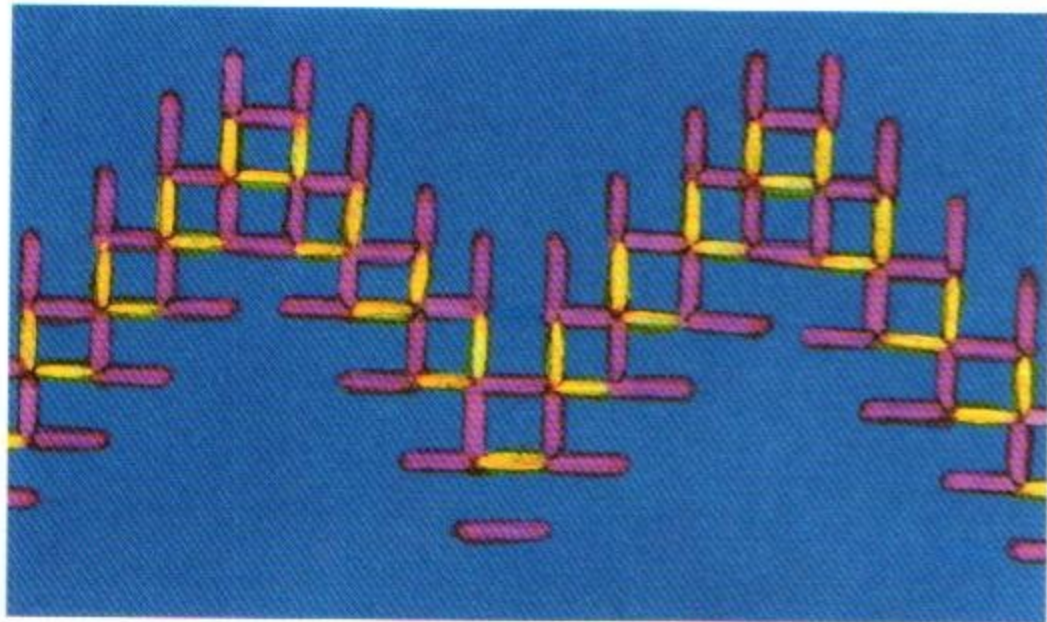
わたしは、うれしくなりました。でも、ちょっと心配しんぱいで、ドキドキします。

「わたしにできるかなあ？」

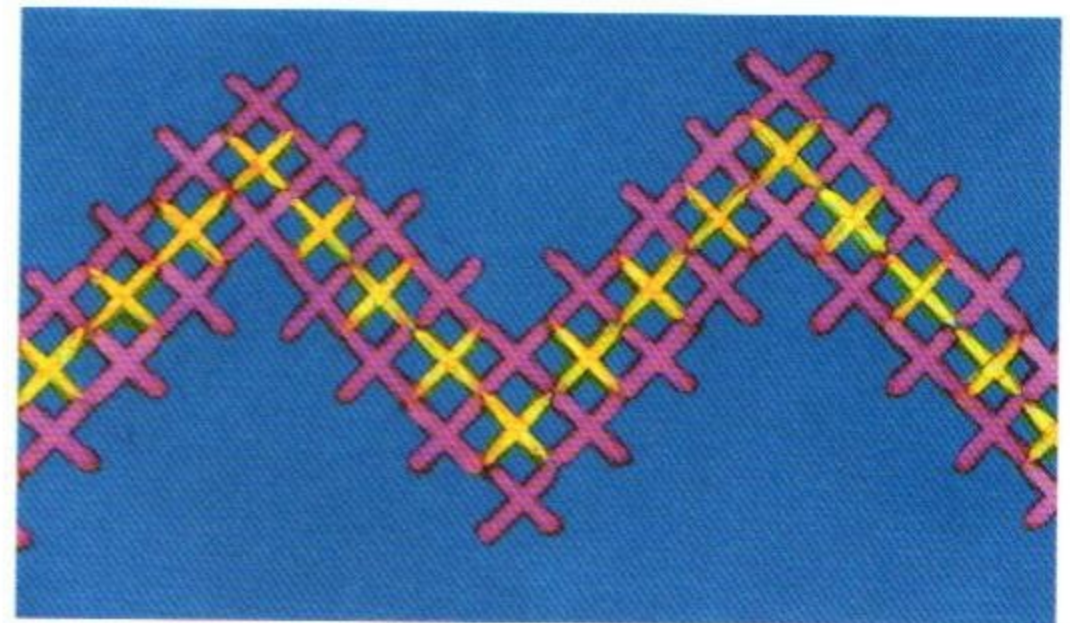
「おかあさんが教えてあげるんだから、できるわよ」と、おかあさんは自信じしんたっぷりに言いました。

わたしたちモンの女の子は、わたしくらいの歳としになると、みんな、おかあさんから刺しゅうを教わるんです。今だってわたしは、おかあさんやおねえさんたちの刺しゅうを横よこで見てきたから、少しはやり方を知っています。でも、まだちゃんと模様もようはできません。いよいよ、自分でスカートのすその刺しゅうしをします。わたしはちょっぴりおねえさんになった気分で、ほんとうにドキドキしてしまいました。

おかあさんに、ひと針ひと針、教わりながら針を刺します。刺しゅうは、布の裏を見て刺すんです。タテヨコタテヨコと、糸が出るように針を刺していきます。でもひっくり返してみると、あら！ きれいなバツテン模様もようのクロスステッチができていました。



(裏)



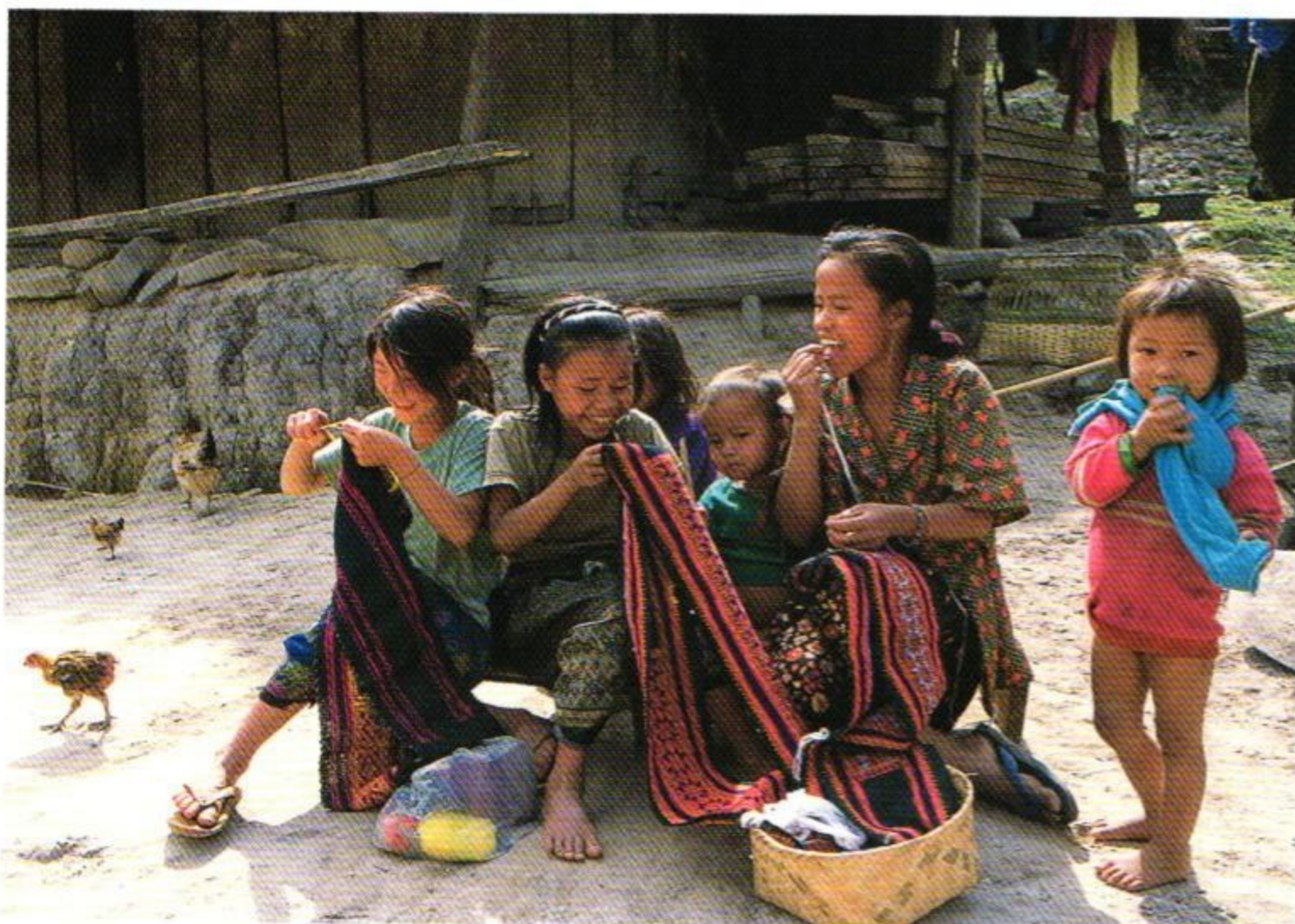
(表)

タテタテヨコヨコ……タテヨコタテヨコ……模様もようによって刺し方もちがいます。表がバツテン模様もようになるように、かならず斜めななめに糸を通します。

ああ、まちがえた。こんがらがってしまいそう。

おかあさんは言いました。

「わたしもあなたぐらいの歳としに、おかあさんに教わったのよ。みんな、最初は、おかあさんに教わってできるようになるものなの。でもじきに、自分の心に浮かんだままに刺せるようになるわ。野の花、山の木……心で考えて刺しゅうするの。好きなものをね」



友だちが集まって、刺しゅうをしているところです。みんなで、おしゃべりしながら刺しゅうをしていると、とっても楽しいの。でも、おしゃべりにむちゅうになると、まちがえてしまうから、気をつけなくちゃ。

山の子どもの仕事^{しごと}



たきぎを背負って帰るよ。

6月、学校がお休みになると、子どもたちも畑仕事を手伝います。雨が降り出して、ちょうど、陸稲の種まきで忙しいときです。

わたしたちの村では、山の斜面に陸稲やトウモロコシを植えています。ふもとでは、水田でお米を作っていますが、山には平地はないので、水田は少ししかありません。だから、山の斜面に畑を作っています。

山で作るお米は、地面に穴をあけては種籾を直接まきます。



7月になると、トウモロコシ
 がなりはじめます。わたしもお
 にいちゃんたちといっしょに、
 畑仕事に行きます。トウモロコ
 シもぎ、イモほり、草取り……
 太陽の日差しのなかでの作業は
 たいへん。でもね、畑への行き
 帰り、野イチゴを食べたり、あ
 まい草のくきを食べたり……お
 やつ探しが楽しみです。

トウモロコシをも
 ぎに行ったよ。



牛を山の草場へつ
 れて行きます。

ミツロウで模様を描く

「今日は、おとうさんの出番よ」と、おかあさんが言いました。

おとうさんは、男の人たち数人で、谷ぞいにある崖へと出かけて行きました。そこには大きなハチの巣がたくさんあるのです。夕方、おとうさんが帰ってきました。なんだか顔がはれています。

「たくさん刺されたぞお。ああ、いたかった」と言いながらも、おとうさんは我慢そうに袋をおろしました。袋のなかに大きなハチの巣が入っています。

わーい！ わたしたちは、あまくておいしいハチミツに大喜び。でも、おかあさんがほしかったのは、ハチの巣からとれるミツロウです。ハチの巣を沸騰したお湯に入れると、ハチの巣は溶けて、きれいな黄色のミツロウとなります。そのミツロウを使って模様を描くのです。

ハチミツは瓶に20本分。そして大きなミツロウの固まりができました。

ハチの巣は、ハチがおおっているの、黒く見えます。槍のようにとがらせた長い棒で、少しずつハチの巣を切りとって、落とします。



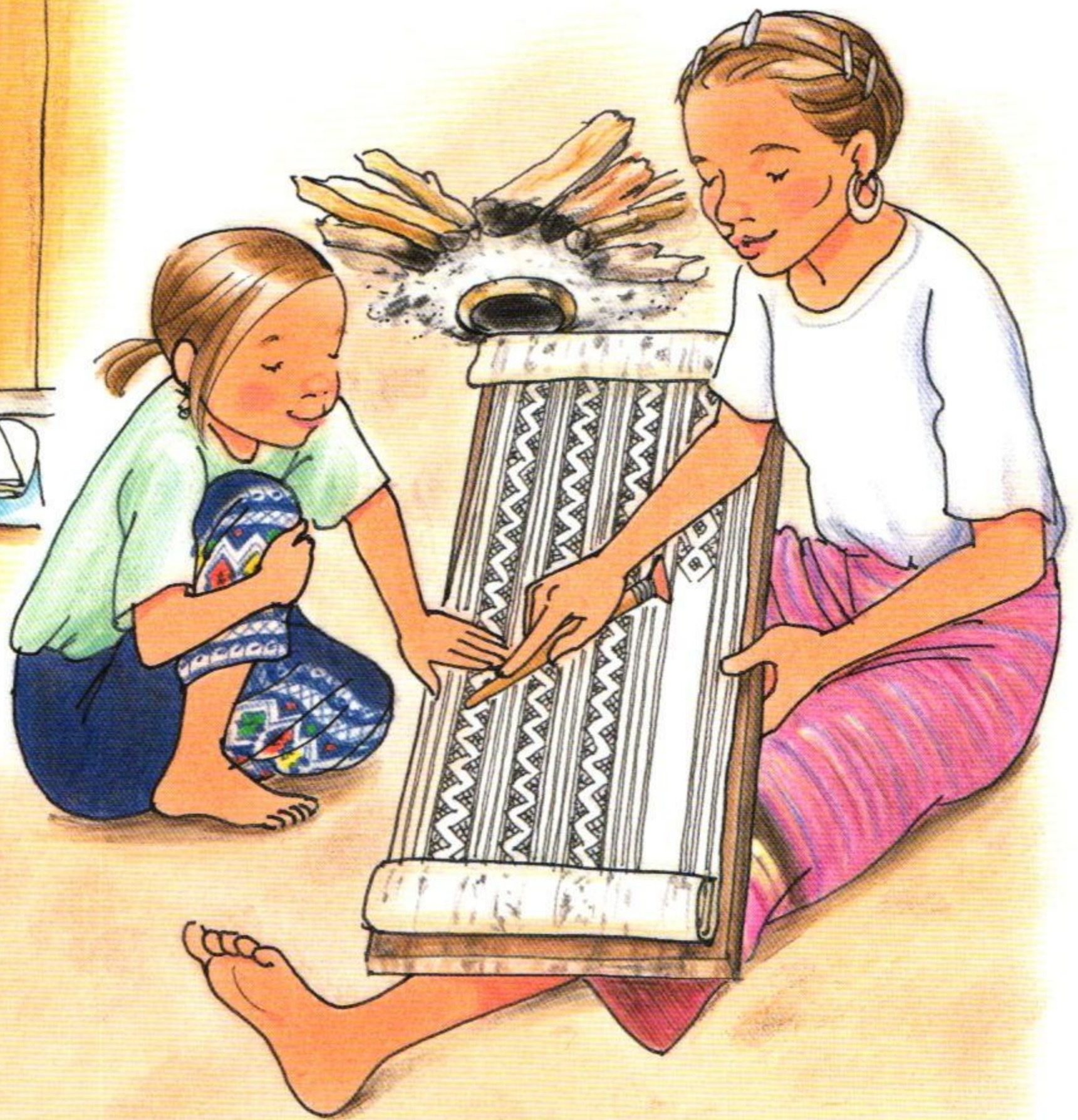
湯を沸かし、ハチの巣を入れ、10分くらい煮る。巣が溶けたら、水に落とす。



ミツロウが固まる。できあがったミツロウは、あまい香り。



模様を描く前に、アイロンかけ？
石の板と丸太の間に布をはさみ、
ゆっさゆっさ、重みで布をのばす。
遊んでるみたい。



ペンはおとうさんが作りました。銅板が3枚重ねてあって、
その間からミツロウが出てきます。手前へ引いて描きます。

おかあさんはいろいろ端に座って、いろいろの熱で溶かしたミツロウをペンにつけては、模様を描きはじめました。お手本も定規もないのに、線や点がペン先から次々と描き出されます。ジグザグ模様は山みたい。バツテンや点やギザギザ模様……でもほんとうは何なのか、おかあさんは知らないそうです。

この模様を描くのはむずかしくて、おかあさんはお嫁にきてから、おばあちゃんに教わったのだそうです。おかあさんは、おばあちゃんに、おばあちゃんは、そのまたおかあさんに教わって、むかしから伝わってきているのです。

石を焼く

今度はおばあちゃんの出番です。おばあちゃんとわたしは「ふいご」をもって村はずれに行きました。

「さあ、石を焼くんだよ」「ええ？ どうして？」

「そうするもんだからさ。さっ、手伝っておくれ」

おばあちゃんは、ふいごを地面にあけた穴につなぐと、穴に炭と白い石を入れて、ふいごをギーコギーコ押ししたり引いたりして風を送り、火をおこしました。

パチパチと炭は赤くなっています。わたしたちは交替でふいごを押し、腕がつかれた頃、「ほーら、石が焼けて赤くなってきたよ」とおばあちゃんが言いました。





おばあちゃんがひろってきた石は、「石灰石^{せっかいせき}」
という石だそうです。

「よく見ておいで」と、おばあちゃんは、金ばさみで焼けた石をつかむと、器^{うつわ}のなかの水にポトンと入れました。ジューツ！ っと煙^{けいり}が上がりました。焼けた石は水のなかでほろほろとくずれていきました。ポトン！ ジューツ！ 次々と石を落^おとしていくと、水はあっという間に、白いドロドロした液体^{えきたい}になってしまいました。石が溶^とけてしまったのです。「わあ、石のおかゆみたい。いったいどうするの？」と、わたしが聞くと、おばあちゃんは、「あと3日たてば、わかるよ」と笑^{わら}いました。そして、「今度は葉っぱ^{こんどは}を取りに行こう」と言いました。

みどり は 緑の葉から青色を作る

おばあちゃんとわたしは、川のほとりの小さな畑へと下りて行きました。

「さあ、これだよ。この葉で、布を青く染めるんだよ」と、おばあちゃんが葉をつみはじめました。藍という草です。つやつやと濃い緑の葉っぱ。指で葉をこすってみると、指の先が緑になります。かごいっぱい、藍の葉を、ドラム缶いっぱいの水につけました。

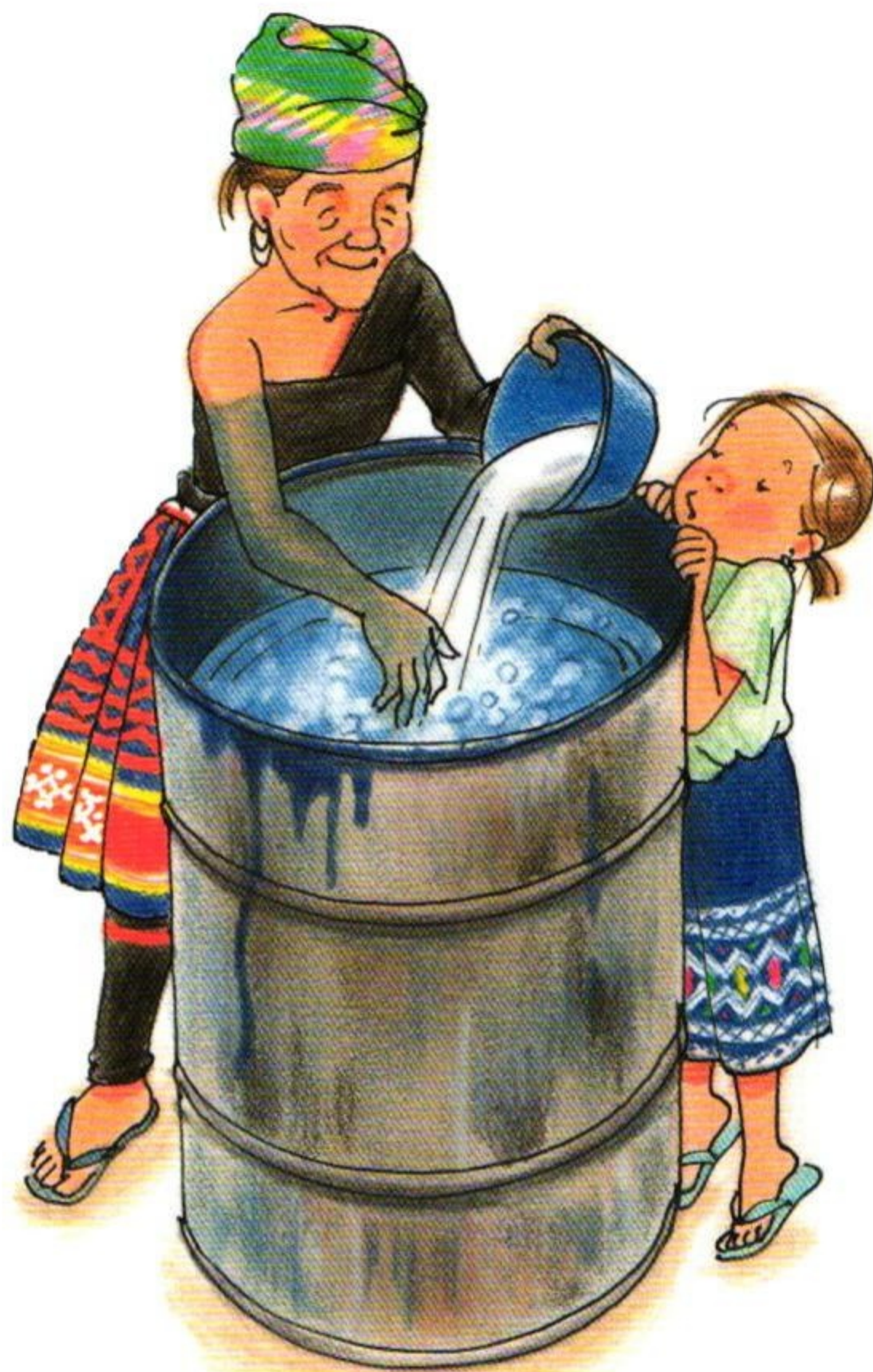


藍はさし木で植える。

1ヵ月目くらい。大きくなると、大人の背より高くなる。



水につけたよ。



おばあちゃんは「石のおかゆ」を入れて、ザバザバかきまぜました。

3日たちました。おばあちゃんは腕まくりをすると、3日間水につかっていた葉っぱを捨てました。水はうすい緑色です。おばあちゃんは、「さあ、石のおかゆの出番だよ」と、白い石の液を水にまぜ、ザバザバとかき回しました。すると、あらふしぎ。水は、だんだんきれいな青色に変わり、青色の泡がたってきたんです。

「この白い液は石灰というんだよ。入れないと青くならないんだよ」

それから、おばあちゃんはわたしに、小さなゴマのような種を渡しました。

「マイ、かんで、つばといっしょに、水のなかに吹き入れておくれ」

わたしは言われたように、ゴマのような種^{たね}をもぐもぐとかむと、背^せ伸びをして、ドラム缶^{かん}の水のなかにプップとつばといっしょに、かんだ種^{たね}を吹き入れました。おばあちゃんがかき回すと、青がもっと濃^こくなったようです。

「ありがとう。これは、もっと青くなるように、水へのごちそうなんだよ」

「おばあちゃん、どうして自分でやらないの？」

「わたしゃ、かむ歯^はがないからね」

おばあちゃんは、ハッハッハと笑^{わら}いました。おばあちゃんの前歯^{まえば}は1本だけなんです。わたしも笑^{わら}いました。

「おばあちゃんは物知^{ものし}りだね。どこで習^{なら}ったの？」と、わたしが聞くと、おばあちゃんは言^いいました。

「わたしは物知^{ものし}りなんかじゃないよ。わたしのおかあさんもおばあさんも、モンはずっとこうやってきたんだ。ただ、そうしているだけだよ」

数日おくと、青い色は、濃^こいえのぐみみたいになり、底^{そこ}に沈^{しず}みます。上ずみの水を捨^すてると、青色の固^{かた}まりが残り^{のこ}りました。これが藍^{あい}の染料^{せんりょう}です。



ぬの 布を染める

今日はいい天気。おかあさんは言いました。

「さあ、おばあちゃんの作ってくれた染料で布を染めようね」

わくわくしてきました。おかあさんは、いろりから取ってきた灰に水を注ぎ、布でこしました。この「灰汁」におばあちゃんの作った藍の染料を入れて、かきまぜました。藍のにおいがします。わたしが「くさいなあ」と言うと、おかあさんは言いました。

「泡がたつてにおいがするのは、染料が活着ている証拠なの。染料が活着ていないと、布は染まらないのよ」

そうかあ。自然の葉っぱからできているから、染料だって活着ているんですね。

この藍色の液に布をつけ、しばらくすると布を取り出して、少ししぼってから干します。

「あれ、うすい水色だ」

「乾いたら、またつけるの。つけては干し、つけては干し、何日も何日もくり返すのよ。

そうしたら、濃い藍色に

染まるのよ」

とおかあさんが言いました。





くり返しくり返し染め、濃い藍色に染まりました。そうしたら、お湯に入れます。すると、ミツロウが溶けて、ミツロウで描いた模様のところだけが染まらずに、白いきれいな模様となりました。

「いつ、どうして、だれが考えたのかしら？」

わたしはほんとうにふしぎになりました。



おじいちゃんの話

ある晩、おじいちゃんがお話をしてくれました。おじいちゃんはたくさんお話を知っています。おじいちゃんが小さい頃、そのまたおじいちゃんが話してくれたんだそうです。

むかし、とても仲のよいモンの夫婦が、小さなひとりむすことくらし

ていた。しかしある日、おかあさんは魔物にさらわれてしまった。おとうさんはなげき悲しみ、必死に探したけれど見つからない。魔物は、おかあさんを山の洞穴に閉じこめ、ハチに姿を変えてしまったのだ。

男の子はまだ小さかったから、オッパイを飲みたくて泣いた。すると、あるとき、男の子の夢におかあさんが出てきた。

「むすこや、おかあさんのオッパイを飲みたいときは、山の洞穴において。おまえは小鳥になって、洞穴のすきまから入っておいで。そして、ハチの巣をつついてミツを吸いなさい。それがわたしのオッパイだよ」

男の子は、夢のなかでおかあさんに聞いた。

「おとうさんは、おかあさんに会えないの？」

「おとうさんは麻になるの。麻になって、モンの手を借りて、糸になり、そして布に織ってもらうのよ。わたしはハチの巣を作り、そしてミツロウになって、麻布の上の模様になるわ。モンがミツロウで麻布の上に模様を描くときに、おとうさんとおかあさんはまた会えるのよ」

男の子は目がさめると、おとうさんにおかあさんの言葉を伝えた。おとうさんは麻になり、2人は再び出会った。それからというもの、モンの人たちは、ミツロウで麻布の上に模様を描き、美しいスカートに作るようになったということだ。

わたしたち、モンのスカートには、こんなお話があったのです。少し悲しいような、でもちょっとロマンチックな気分になりました。

もうすぐスカートができる

染め上がった布のギザギザ模様の上には、赤い布をリボンのように細く切って縫いつけます。

「山にくらしてきたモンだから、ギザギザ模様が好きなのかねえ」とおばあちゃんが笑いました。



藍で染めた布の上に、さらにリボン状の赤い布を縫いつけます。

いそがないとお正月に間に合いません。村の女の人们は大忙し。わたしのすその刺しゅうも、仕上げまでもう少し。急ピッチでがんばります。



スカートができた



やっと刺しゅうができました。ほら、見て。
みんな一人ひとりちがうんです。いろいろな模様があるの。



おかあさんは、すその部分^{ぶぶん}にわたしが
作った刺しゅうの布^{ぬの}を縫^ぬいつけます。

そして、指^{ゆび}でひと折り^おりずつつまみなが
ら、細かくひだをよせていきます。しつ
け糸^{はり}と針^{はり}で縫^ぬい縮^{ちぢ}めて、細かくたくさん
たくさんプリーツの入ったスカートを作
ります。

もうすぐできあがり。わたしはわくわ
くドキドキです。

「早く、着^きたいな」

でも、おかあさんは言ったんです。

「しつけ糸^ぬを抜くのは、お正月がきてか
らよ。もう少しのしんぼうよ」

「だって、今^き着てみたいよ」と、わたし
が口をとがらせると、おばあちゃんが言
いました。「もうすぐさ。稲刈^{いねか}りが終^おわっ
て、新月の日がきたらお正月なもの」





おばあちゃんのスカート

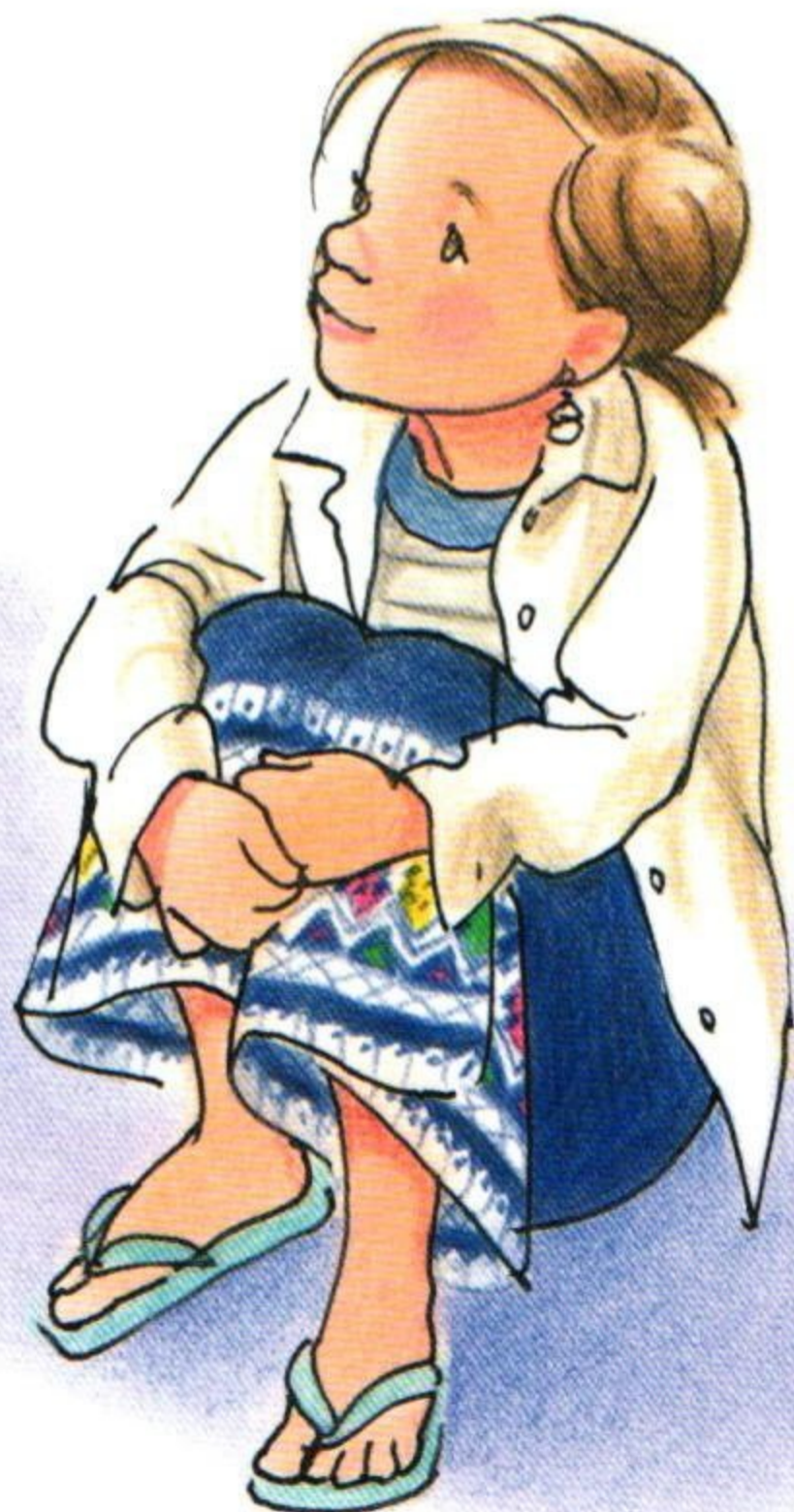
おばあちゃんは、目を細めて言いました。

「新しいスカートっていうのは、うれしいもんさ。これからマイは、お正月、お嫁入り、きつと何回も新しいスカートをおろすときがくるよ。おかあさんにいろいろなことを教わって、ぜんぶ自分で作れるようになるんだよ」

おばあちゃんは、大切にしまってあったお嫁入りのときにはいたスカートをもってくる、見せてくれました。おばあちゃんのお嫁入りのときなんて、もうずっとずっと前なのに、スカートはしつけ糸がかかったまま、鮮やかな色をしていました。おばあちゃんは、わたしにそっと耳打ちをしました。

「おばあちゃんのおかあさんが作ってくれたんだよ。あんまりうれしかったから、一度着ただけで、大切にあってあるの。このスカートはね、おばあちゃんがあの世に行くときに、着ていくつもりだよ」

こう言うと、おばあちゃんはわたしの頭をなでました。それから、おばあちゃんはスカートを抱いて、いつまでも座っていました。

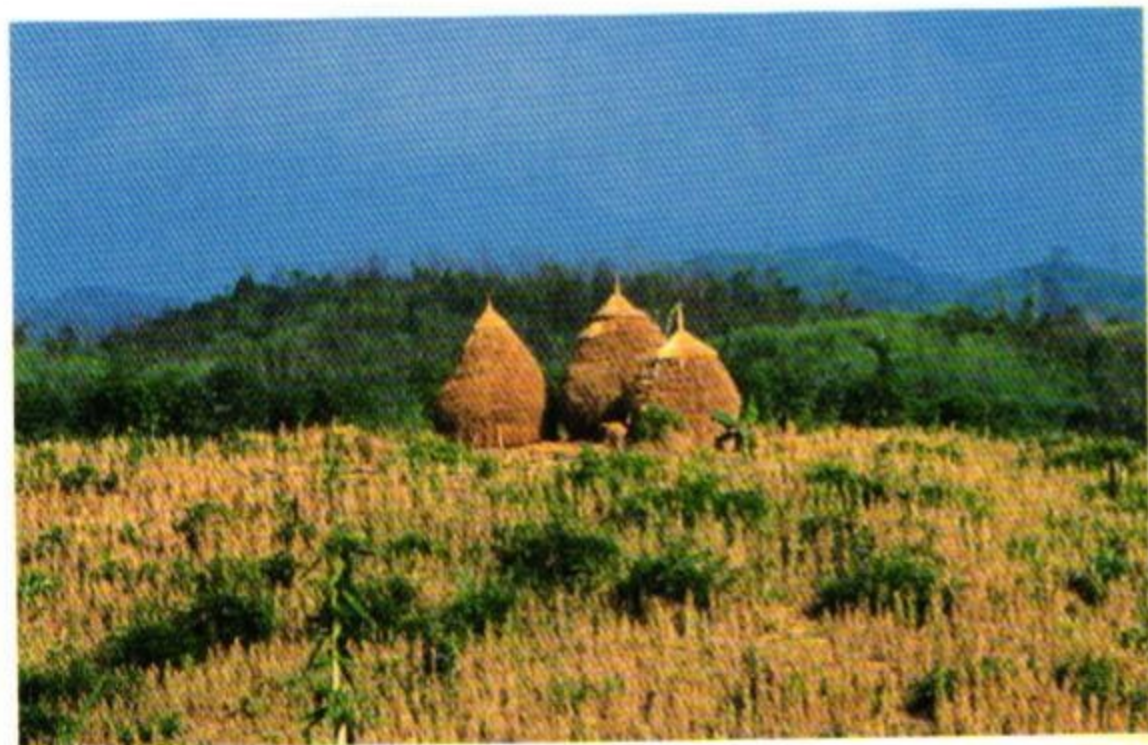




もうすぐお正月

さあ、12月も近づいた頃、山の畑の稲が黄金色の重たそうな穂をたれました。稲刈りがはじまりました。山の畑では、朝早くからみんなどこかうれしそうに、稲を刈っています。そして脱穀を終えると、馬の背につんで、家のとなりに作った米倉まで運びます。

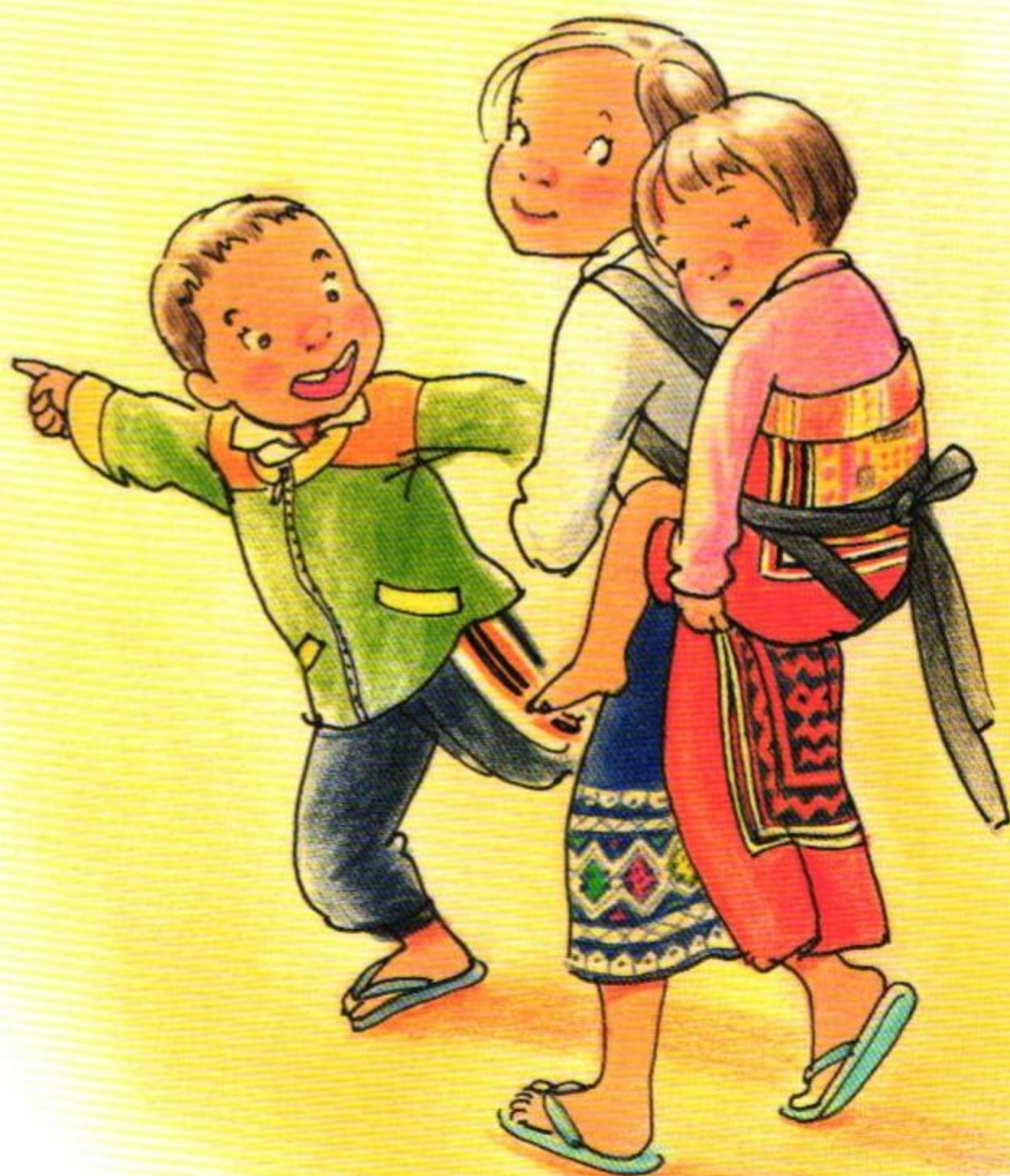
たわわに実った稲を刈り取ります。稲刈りが終われば、お正月。

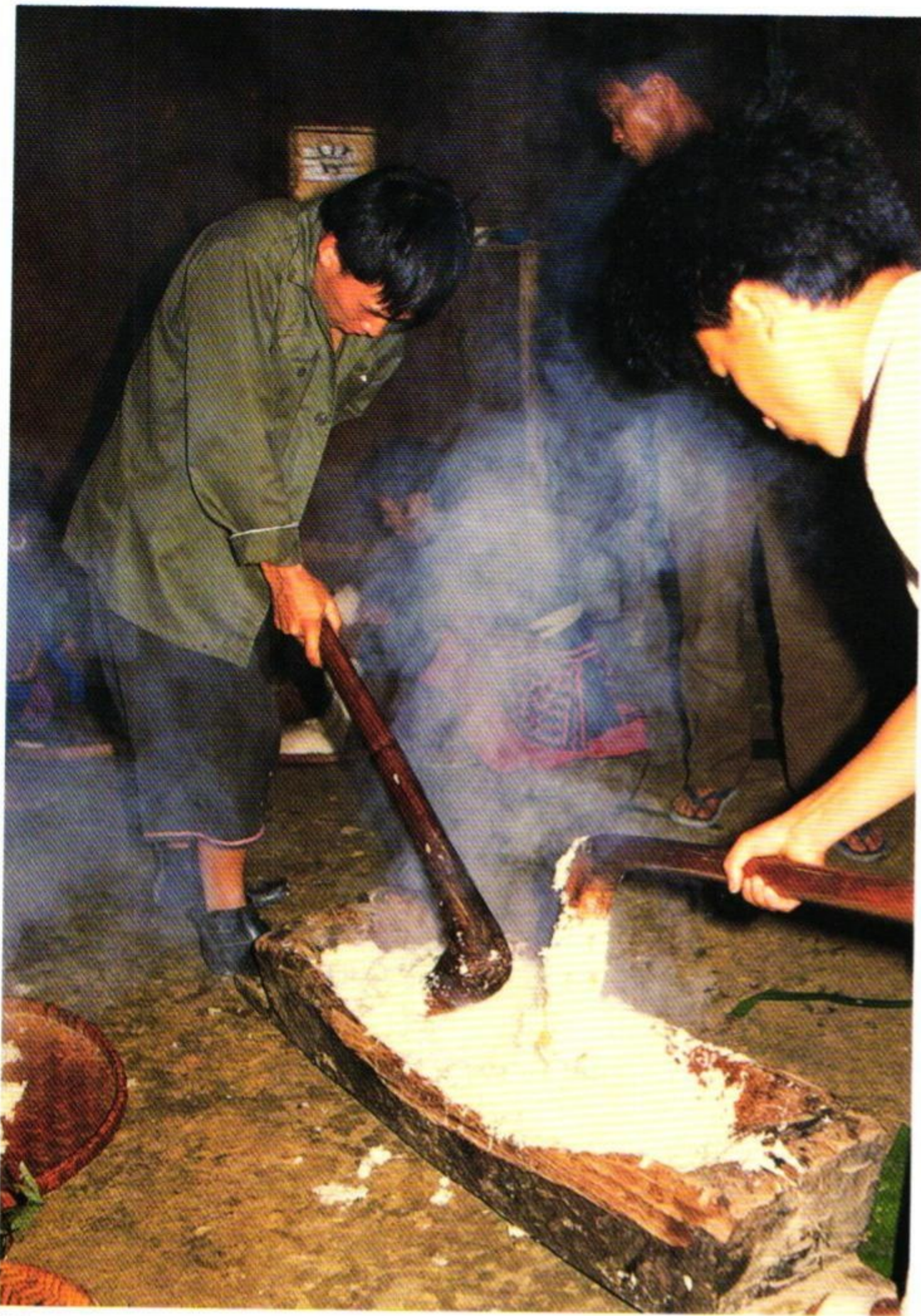


収穫された稲の山。



山の馬は力もち。稲も馬が運びます。

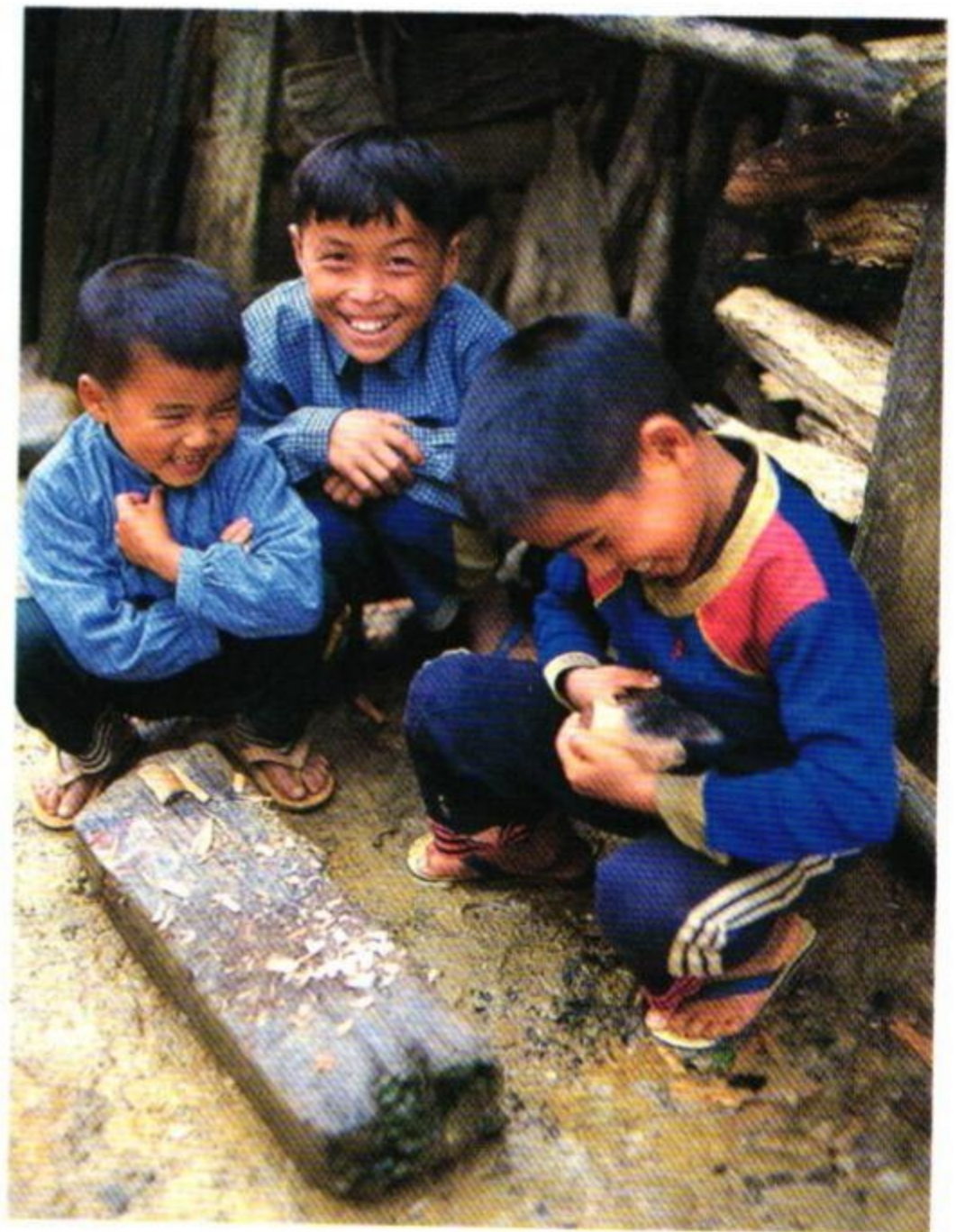




もち餅つき。モンのうすは横長。^{よこなが}



もち餅を丸めて、バナナの葉につつまます。^は



コマを作っているんだよ。

今日はおおみそか大晦日。

男の子たちは、木をけずってコマを作り、コマ回しの練習をはじめました。村のあちこちの家で大そうじをしたり、もち餅つきもはじまりました。

わたしが新しいスカートをはけるのも、いよいよ明日です。

モンの正月



元旦の朝、村では、お互いの家に呼んだり呼ばれたりして、ごちそうを食べます。

わたしはごちそうもうれしいけれど、早くスカートがはきたくてしかたがありません。

やっとおかあさんが、「マイ、おいで」としつけのかかったスカートをもってきてくれました。いよいよしつけ糸をとります。

細かく細かくプリーツが入ったスカート。

おかあさんとおばあちゃんと、そして、わたしが作ったスカートです。

山の自然のめぐみを分けてもらって、心をこめて、時間をかけてできたスカートです。

おとうさんもうれしそう。みんなどうもありがとう。

わたしがくるくる回ると、スカートはうれしそうに広がりました。

村の女の子たち、おねえさんたちも、みんな新しいおろしたてのスカートをはいて、家から出てきます。

わたしもうれしくなって、走っていきました。

今日は一日、村の広場で遊ぶんです。広場に集まったスカートは楽しそうに、色とりどりの歌をうたっているみたいです。





9年前、はじめてモン族が暮らすファイソン村に行きました。山道をのぼり、峠を越えて村に着いたとき、女の人たちの鮮やかなスカートが目飛び込んできました。そして、その手が藍で青ずんでいるのがとても印象的でした。今だに自然の材料から糸を紡ぎ、機を織り、すべて手作りで民族衣装を作っているとは、びっくりしました。

それから何度も村を訪ねていますが、行く度に、「こうやって糸を紡ぐのね」「こうして藍の染料を作るんだあ」と、あれこれ見ることが出来ます。1年を通して女の人たちは、畑仕事や家事の合間に、いつも何かしらの作業をしているのです。手間と時間を惜しみなくかけて作



作者のことば

いつまでも伝わり続けてほしいもの

安井清子

つてきているのでしよう。

今年、村まで車道が通りました。

そして女の人たちは、普段スカートをはかなくなりました。「古いスカートを買いつけに来る人がいるから売ったわ」とのこと。

観光地のみやげもの屋に売られていくのでしょうか？

みんなプリント地の腰巻き布を代わりに着ていますが、少し寂しい気がしました。

それでも、まだスカート作りは伝わっています。まだはなをたらしめている5歳の女の子、ジユアが一心に刺繍をしています。

彼女はおねえちゃんや友だちと、キラキラと楽しそうに笑いながら針を動かして、みんな、刺繍をするのがうれしくてたまらないという感じでした。

今年のお正月、みんなのスカートができあがっていることを楽しみに村を再訪したのですが、「まだできてないの」とのこと。

5歳の子が自分の両腕の長さの4倍もの刺繍をするのですから、そりやそうですね。きっと、来

今月も美術

バンザイ・コーナー

柳幸典 / 1991

この作品を展覧会で見たとき、「エッ、これだけ？」とほくはちよつとびっくりした。だって二枚の大きな鏡が展示室のすみっこ（コーナー）の壁に貼られて、ウルトラマンとウルトラセブンの人形が、バンザイした格好で、すみっこを埋めるように置かれているだけなんだから。けれどジツとその場に立っていると、いろいろ見えてきたんだ。まず赤と銀色の人形たちが作るこのかたち、何かに似てるぞって思った。そう、これって

うらがわを「見てみよう！」→→→→日本の旗に似ているよね。鏡に映っている人形と、実際の人形とがかわさってひとつの、マルのかたちになっている（鏡に映っている人形の方が多いんだけど）。でもどうして全員がバンザイしているのだろう。どうして、背中を向けているのだろう。よく見るとマルの真ん中に誰もいないし……。鏡に鏡を映すように果てもなく、思いが浮かんでくる。なぜか不安な気持ちになったり、逆に愉快に感じたりもする。いろんな気持ちもあわせて、けっして「これだけ」じゃない、見るってことの不思議を感じるね。

（解説）福永信



文/安井清子

11



絵/西山 晶

1955年鳥取県生まれ。女子美術大学卒業。雑誌等にファッション・生活・映画についてイラスト・エッセイ連載中。本のさし絵は「ズボンとスカート」(たぐさんのふしぎ傑作集)など。著書に「楽しい暮らしの玉手箱」(じゃこめてい出版)、「こんないいね! コーディネートブック」(日本ヴォーグ社)がある。

るスカート。女の人たちは「大変よ」と言いつつも、黙々と手を動かして続けています。ずっと昔から女の手から手へと伝わる

年にはできあがるでしょう。山の村の生活も変わりはじめていますが、女の子たちは、自分たちの手に伝統を受け継ぐことのすばらしさを忘れずにいてほしい、と願いながら、この本を作り直しました。

来月号は「ロバのつくった道」
この本の作者たちは、山に囲まれたメキシコの村に住んでいます。その村を一本の道が走って、

います。インディオの男がロバの背中にマキを積んで歩く道は、乾期は土ほこりが舞い、雨期になるとどろんこでした。その道も一昨年には舗装され、車がスピードをあげて走るようになりました……。こんな背景から生まれたロバと道のお話。

（竹田鎮三郎・原案/絵
清水たま子・文



ふしぎてんし

カワキタ・カズヒロ



わたしの住むヘルシンキ市には、フィンランドでいちばん古い遊園地がありま
す。日本の大きな遊
園地に比べると小さ
いですが、フィンラ
ンドの子どもたちに
とって、一度は行ってみたいと
ころナンバーワンとなつていま
す。夏休みになると子どもたち
がたくさんやってきます。観覧
車、ティーカップ、いろいろな
種類のジェットコースターなど、
日本の遊園地でもおなじみの乗
り物がたくさんあります。
最新式の乗り物にまじって目
を引くのは、53年前に造られ、
今でも健在という木造のジェツ
トコースターです。乗り物は金
属ですが、コースはすべて木で
造られています。木でできた細
い橋のようなコースを見ると、
「こんなんでだいじょうぶかし

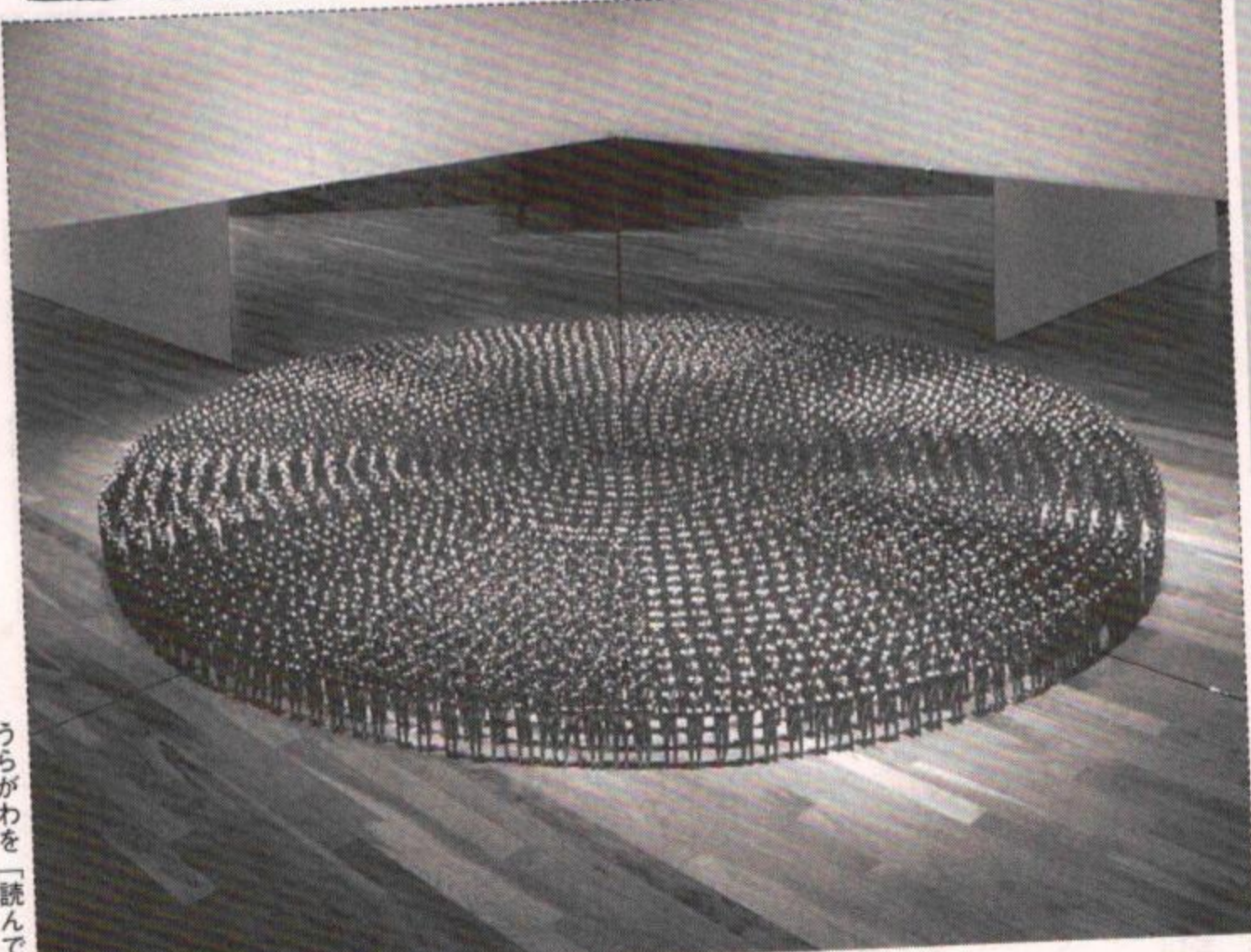
ら」と心配になってしまいます
が、事故は今までなかったし、
点検もしているので安心して乗
ることが出来ます。コースをい
きおいよく走り抜けるジェット
コースターをよく見ると、どの
乗り物の最後部分にも人が立つて
います。こ
のジェット
コースター
のブレーキ
は、なんと
手動式なの
です。乗り
物がいきお
いよく坂を
下りていく
ときや、カーブの手前になると、
乗り物の最後部分に立っている係
の人が手でブレーキをかけて、
乗り物のスピードを調整するの
です。係の人の思い通りに、速
く走ったり、遅く走ったりする
というわけです。小さい子ども



や年配の人が乗っているときに
は、少しスピードをゆるくする
という話も聞いたことがあります
す。わたしは金属でできた機械
的な最新式のジェットコースタ
ーより、木のぬくもりと人の温
かさが感じられる、このジェツ
トコースターが好きで
す。猛スピードで坂を
下りていくのだけれど、
なんとなく走りがやさ
しい感じがします。そ
れにしても立ったまま
でジェットコースター
に乗るってどんな気持ち
でしょうね。
フィンランドに住ん
でいて「おもしろいなあ」「ふ
しぎだなあ」と感じてきたこと
を毎回書いてきましたが、今回
でわたしの連載は終わります。
長いことどうもありがとうございました
しました。
(ミドリ毛利ヴァルトネン文・絵)

●10月号の
「絵とき生
きものは円
柱形」に掲
載された3
曲の歌を、
当社ホーム
ページ上で
聞くことが
できます。
歌うはもち
ろん、歌う
生物学者
こと、作者
の本川達雄
さんです！

この作品は香川県のベネッセハウス(TEL087-892-2030)で見ることができます。Y
撮影：安齋重男



今月も美術

バンザイ・コーナー

柳 幸典 / 1991年

先住民の目から見た アメリカの西部開拓時代の物語 スピリット島の少女 —オジブウェー族の一家の物語—

ルイズ・アードリック 作 宮木陽子 訳
冬の間丸太小屋に住んでいたアメリカ先住民の少女オ
マーカヤズの一家は、春になると樺の木で作ったキャン
プに移り、豊かな季節を楽しみます。しかし少女の
村に恐ろしい伝染病が発生し……。



世界傑作童話
シリーズ
小学校中級から
304頁
定価1785円
福音館書店

アドレスは
<http://www.fukuinkan.co.jp/>

うらがわを「読んでみよう」



★すきな音はサクサクのコロツケを食べるときの「サクツ」という音。どんなオーケストラの音楽よりもいい音です。きらいな音は、「ブーン」と蚊が飛んでいる高い音。イライラして夜も寝られませんか(空の錬金術師)

★きらいな音は、地しんの音！去年、私の住んでいる宮城県では毎日のように地しんの音をきいていた。なのに、ちっとも慣れなかったよお (そらまめ)

◎校陽の近所で66才のおばあさんは「子どものころ、空襲でいた爆撃機—B29の音がこわい。今も飛行機の低い音がイヤ。ビクツとする！」そうだ。

★きらいな音はガラガラドツシヤン!! かみなりの音。すきな音はリンリンリン、小さな鈴が鳴る音です (ポニーテールをしている女の子)

★すきな音は花火のドオンと鳴

みみずの学校コーナー

卒業式スペシャル!
わたしこのたび××を卒業します(したいです。)

6年生ばかりが卒業じゃない。あかちゃんはおむつを卒業、アイドルを卒業するタレントもいるね。さてみんなが今年で卒業する(したい)ことは何ですか? そしてどんな卒業式をする? ふ新聞の××記者はそろそろ独身を卒業して独身卒業式を……ってそれはたんなる結婚式だヨ! 11月10日しめきり、3月号で発表。あて先〒113-8686 福音館書店ふしぎ新聞社 ファックス: 03-3942-2088 email=fushigi@fukuinkan.co.jp

る音。アイスコーヒの氷がとけてカランとぶつかる音。きらいな音は、海に流れてきた流水がビキビキとひしめきあうさむーい冬の音。あ、でも、サントクロースのトナカイがシャンシャンと空からおりてくる音は大歓迎だなあ (りん)

◎季節にも音があるね。カキやミカンが育つ音。雪がふる音。お正月や誕生日だつて音がする。

★ゴキブリがカサコソいう音がすき。夏にとつてきたクワガタがガサゴソいう音はきらい。あれつ、逆か? (太)

◎音が動くとき必ず音がするんだ。音は言葉よりも古くて深い。でも音の研究は近代からで、ガリレイ、メンセンヌ、ニュートンからはじまったらしいよ。

★「チャリーン」と、小銭の落ちた音が、すき

★「コッキーン」と鳴るピットの音すき。「ゴキツ」というにぶい音はきらい。怒られるときのBGMだから (梵)

◎音のすききらいって、自分の「快不快か」で決まるんだな。

★すきな音は「ごはんよ」と呼ぶ声。松の葉の風にゆれる音。小川のせせらぎ。カッコウの鳴き声。音のない夜の道の足音。急病のときの救急車の音。かみなりのあとの土砂降りの雨の音。きらいな音は「ピンポン」という玄関のチャイム。夜中にテントをかかさかささせる音。夜中の電話の呼びりんもいや (勇)

★ほくは電話の向こうで「合格!」と言ってくれる音がすき。……いつになるやら (藍)

◎受験勉強して待つてる音もあるんだ。校陽は今、愛犬リリが散歩から帰る足音を待っている。では諸君! いい秋を!

◎物が動くとき必ず音がするんだ。音は言葉よりも古くて深い。でも音の研究は近代からで、ガリレイ、メンセンヌ、ニュートンからはじまったらしいよ。

★「チャリーン」と、小銭の落ちた音が、すき

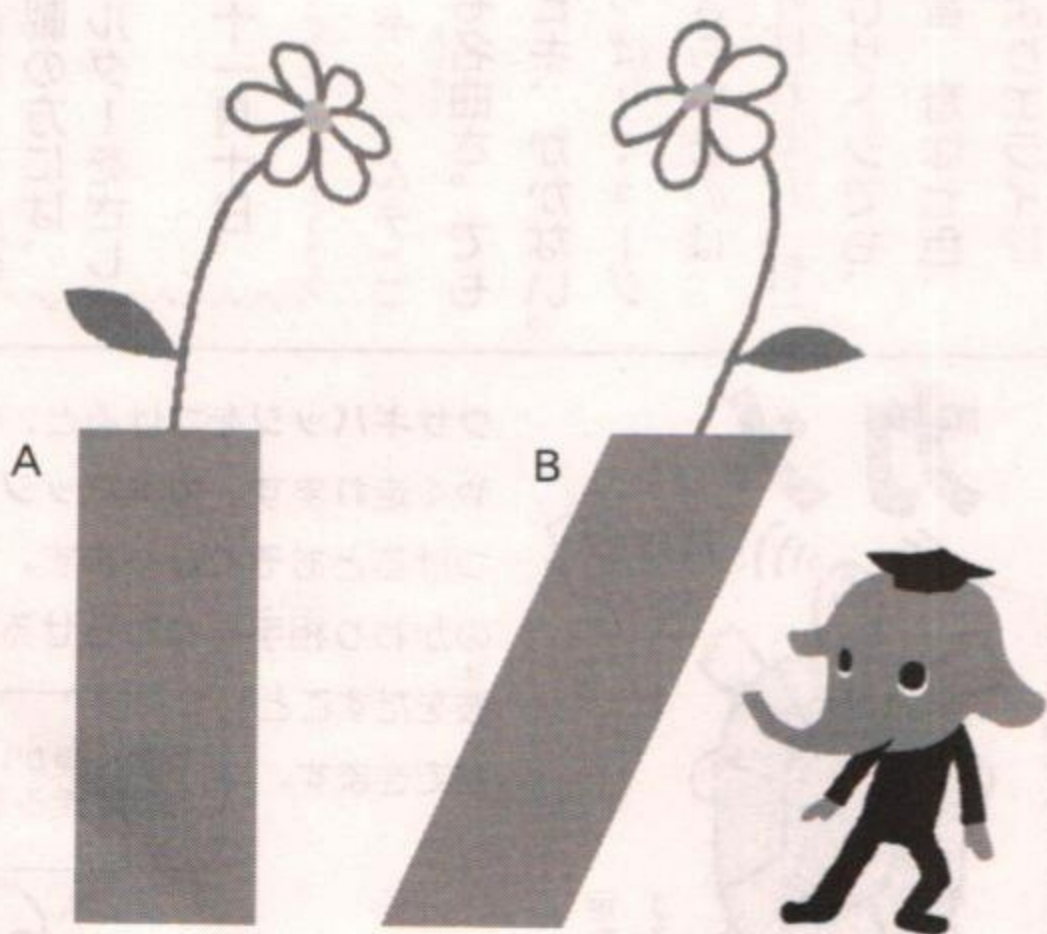
(有美子)

(校陽・高橋 幸子)

絵・宇田川新聞)

ポケットパズル

高さも太さも同じ、ふたつのかびんがあります。水がたくさん入るのはどちらでしょう?



先月号のこたえ 上 (声にだしてよむと、法則がわかります。)

ふしぎ博物館 地上の☆

マヒトデ
ウニやナマコと同じ仲間、棘皮動物。

スターフルーツ
熱帯アジア原産の果物。セリロが☆形なのでこの名前に。別名五斂子。カタバミ科、コレシ属。

星砂
実は砂ではなく、原生動物、有孔虫の一種で殻が☆形をしている。死ぬと殻が残ります。

星形特殊ねじ
携帯電話などに使われていて、専用のドライバーがないと開けられません。

マヨネーズの口
☆形のもあるよ

ふしぎ新聞

ふしぎ新聞社
〒113-8686 東京都
文京区本駒込6-6-3
福音館書店

十一月のひょうご
一一月見ても
イイ子にやしないよ
せつべきくん

楽しい三月のひょうご募
集中! 掲載の方には、
わんだーホルダーをさし
あげます。
しめきりは十一月十日。

「秋深し 月が夜汽車にこんばんは」。おそまつ。校腸は線路の近くに住んでるんだ。走っているのは電車なんだけど、名月には「夜汽車」といつたほうがあうんだよね。ゴーゴーと遠くに呼びかけてるような夜汽車の音。耳をすますとふしぎだ。それにこたえるように、シンシンと地上を照らす名月の美しい音まで聞こえてくる気がする。きみなら、どんな音がすき? それともきらい?

★ミミズだから水の音はどう? 水面いっぱい水を落とせばいい音になると思うよ!? 鳴らすのは校腸。ジャポーン(ピノキオ)は校腸。ジャポーン(ピノキオ)

◎ミミズは美女だもんね。でもポチャン、チヨロチヨロ、水の音もさまざま。あるいは……★滝がドドオーって流れ落ちる豪快な音がすき。校腸は「養老の瀧」で凍ったジョッキをピキピキってとかす生ビールの音がすきなはず! (未成年)

◎シユワシユワシユワとあがってくるアワの音もたまねえ。

★風や川のせせらぎなど自然の音がいい。きらいな音は黒板をつめで引っかく音(ゆすらうめ)◎背中をかくのは心地いいけど。★きらいな音



は黒板をつめでひっかく音です。キーキー……やーだ。すきな音はオーケストラの音! (みみずの転校生)



★私のすきな音はオーケストラです。いろんな楽器がまざってきれい

★リコーダーの低いド、ピアノカやピアノの低いドをませて。アツ、シンバルも(マルちゃん)★フルートの音がすき。きらいな音は、指を組んでボキボキ鳴らす音。キヤー、今ボキボキ鳴



きな音は救急車のサイレンと波の音、あとお父さんのイビキ? 校腸とお父さん、どっちのイビキが大きいかな↓予想は、お父

さん(ルプンタッテンへんてこ)◎ときにイビキも名曲さ。でも校腸は美女、イビキ、かかない★すきな音はやっぱりミュージックでしょう。きらいなのは、「サトシッ」と呼ばれる音(哲)◎字で書くと同じサトシでも、いい音やこわい音。音は七色、いや百色さ。字よりエライ!? ★「けいっ」と注意されるとき

の音、「今夜は野宿だな」という神の声はきらい。飲み物をたつぷり注いでもらうときの音がすき

◎ンダンダ。おいしい物には特別の音がするぞ! ★おなかの音がすきするときのうどんをすすする音がすき! きらいな音はまだ眠いのに、起きる起きるという目ざまし時計のうるさい音 (3・6%ゴム人間な人)



石川県の清水一磨くん、アイデアありがとう!



ウサギバッジをつけると、はやく走れます。カメバッジをつけるとおそくなります。そのかわり相手をねむらせる電波をだすことができます。うまくつかわけて走ろう。

あなたにもふしぎがみえる
マキノ不思議製作所
所長: 牧野良幸

レイアウト 森枝デザイン事務所

月刊「たくさんのふしぎ」通巻236号「わたしのスカート」

“My Skirt—The Blue Hmon's Costume in Laos”

Text & Photographs © Kiyoko Yasui, Illustrations © Akira Nishiyama, 2004.

2004年11月1日発行／発行所 株式会社福音館書店 〒113-8686 東京都文京区本駒込6-6-3／販売部03(3942)1226 編集部03(3942)6016

この作品を許可なくして転載しないこと／乱丁・落丁本は、小社制作課宛ご送付ください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

印刷 精興社／製本 備プラン

<http://www.fukuinkan.co.jp/>



Published by Fukuinkan Shoten Publishers, Inc., Tokyo, Japan. Printed in Japan by Seikosha Co., Ltd.



定価 700円 本体 667円 ㊞

雑誌 15923—11



4910159231148
00667